
高校生時代～殺意を抱いた今まで

魔法戦隊三輪野助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生時代〜殺意を抱いた今まで

【Nコード】

N0296B

【作者名】

魔法戦隊三輪野助

【あらすじ】

高校3年生の越水七槻から、殺意を抱いた今の様子までについての話です名探偵コナンのコミック54巻〜55巻より

これから、はじまった(前書き)

親友との朝の会話です
下手だと思えます

ここから、はじまった

いつものように、彼女は親友と学校へ行った

いつもの何げない会話を2人で：

「高校生探偵…越水七槻　が事件解決
だってさ…

なっちゃん、すごいね…」

「別に　ボクは普通のことをやっただけだよ…！
もっとすごい探偵はこの世にたくさんいるよ」

「またまた、謙遜しちゃって…」

彼女達はもう高校3年生

卒業式にも近い

離れていく…

「ねえ：　はつね

はつねの将来の夢は何？何になるつもり？」

「私は憧れのお嬢様の家でメイドとして働くわ

なっちゃんは？」

「ボクはそのまま探偵でもやるけど！」

「なっちゃんらしいね。」

お互いに夢を叶えて卒業しても親友でいようね」

「うん：」

朝の会話はとても楽しいものだった。

この後、残酷な事件に遭うとも知らないで：

彼女たちは、何も知らない。

このあとどんな事件が、自分たちに待ち受けているのか・・・

そしていくつかの事件に巻き込まれのか

まだ分からなかった。

彼女たちは、そのまま学校へ向かった。

はつねは、七槻の2人はいろいろしゃべっている。

はつねは、見た目は、楽しそうにしゃべっているが、内心心配なことがある。

少しうつむいている。

将来のことにつけて悩んでいる。

七槻は、平和そうにしている。

その姿がはつねにはうらやましいのである。

彼女たちは、学校に着いた：

もうすぐ、卒業 (前書き)

言い忘れていましたが、

越水七槻の親友〔はつね〕と

殺されたラベンダー屋敷のお嬢様〔小池せれん〕の名前の由来は、
ありませんし、原作はどういう名前かも、しりません

適当な架空人物です

もうすぐ、卒業

学校★★★

いつものように、辺りはざわついている
彼女たちもしゃべりながら、教室まで歩く

教室に入ると、みんな彼女のところに集まって

「事件の内容教えてくれよ…。」

とか、

「お前、どうやったら事件が解けるんだ？」

など、クラスのほとんどの人は必ず 彼女に話しかける

彼女は大人気なのだ

「ボクは、ただ犯人の仕草などを見逃さないだけさ…！」

「へえ… なっちゃんって、卒業しても探偵続けるの？」

「うん！ そして、名探偵になるんだ

最近、名探偵に成りつつあるが多いからね…」

七槻は、探偵について語り始めた

長い話だが、彼女が話しているから みんな真剣に聞いている

その話を聞いているはつねは、
夢に対する「憧れ」が、七槻にもあることがわかった！

はつねは、四国の

ラベンダー屋敷に住んでいる

「小池せれん」お嬢様に憧れてメイドをやりたい
と思ったのである

はつねは、せれんお嬢様のために

働きたいという夢がある。

だから、はつねは名探偵になりたいという七槻の夢の「憧れ」を

感じ取れるのである

もう卒業式の練習だ

卒業・

その言葉は、はつねにはつらい

だって、はつねの夢は 七槻は関係ないから

助けてもらえるとは限らない

今までは当たり前のように助けてくれた七槻が
進み、助けてくれない気がした
自分探偵の夢に

七槻の夢に対する気持ちはすごい！

だから、自分の夢が少し不安になった

卒業式なんか なくてもいいのに

「ねえ、なっちゃんは卒業式なんてやりたい？」

はっねは、卒業したくない

卒業すると、七槻と

近いうちに 二度と会えない気がしたのである

もうすぐ、卒業 **(後書き)**

評価をお願いします。

卒業は嫌＊ 揺れ動くはつねの想い（前書き）

話が急になってしまいました

卒業は嫌＊ 揺れ動くはつねの想い

卒業式の練習で 皆 体育館に集まった

その時も、はつねは別れると思うととてもつらかった

卒業式の練習内容は、

卒業証書をうけとるまでの歩き方とか

卒業証書の受け取り方など、 細かいことに気をつけること

そんなくだらない練習で七槻との大切な時間が

なくなっていく気がしたはつねは不機嫌な様子である

卒業証書かあ。

これをもらったら 本当に卒業してしまうんだ

あゝあ なんで、人には別れがあるのだろうか？

別れたくない人と 別れるなんて嫌

「ねえ、 お願い なっちゃん 卒業式をつぶしていい？」

こんなくだらないことで

なっちゃんと別れたくない

親友なら私の気持ちわかる？..

これがはつねの本音である

体育の時間

その授業をはつねは見学した

七槻は、とても楽しそうに運動をしていた

もともと彼女は、運動神経がよい

いつも目立っている

そして、いつもみんなに人気..

いいなあ..

はつねは

悩みもなく

生きている七槻がともうらやましいかった

授業中、はつねは、しょんぼりとしていた。

「はつね どうしたの？ ボクにできることなら、協力するよ。」

「いいなあ： なっちゃんは、
いつもみんなに囲まれて、とても楽しそうで！
私は、 つらい 別れがつらい：」

何いつているだろう
卒業してからでも 会えるよね：

「ボクは、卒業してもはつねがつらい思いをしたら
助けるよ：」

七槻の言葉は、信用できた、

しかし、

せれんお嬢様が、葉に溺れかけているといううわさは
信じたくない

ウソであってほしい

本当に、葉に溺れているのなら
私には、手助けさえもできない

なっちゃんじゃないと お嬢様を助けることができない

私は、なっちゃんに頼るしかないのに：

そのなっちゃんが、別々の道を歩むのなら

私の心は不安になる

でも、お願い　お嬢様を助けて！

私の心の支えになるせれんお嬢様を…

なっちゃんでも、助けることができるかわからないけど…
はつねは、ものすごく卒業に不安になった。

放課後★★★

「はつね　一緒に帰ろうよ…！」

「うん…!!」

ここで一緒に帰らなければ、なっちゃんに迷惑をかけてしまう

本当は1人で、帰りたい

けど、なっちゃんが心配してくれる

それもまたつらい

とりあえず、はつねは七槻と一緒に家まで帰った。

家では、悩み事を考えにくい ので、

はつねは、誰もいなくなるような時間に学校に戻った。

「なっちゃん、ゴメンね…」

と、心の中でオモイながら、はつねは、

誰もこないという 古びたパソコン室に入ることを決意した

でも、誰もこないパソコン室に不思議なことに 何か鈍い音がした

はつねはその音が気になったので、

パソコン室に入った

すると、

眼鏡が、光っている人が花瓶で

倒れている人を何回も殴っている 光景があった

はつねは、大声も出せないぐらい ビククリして

何も言えなかった！

「私が、殺しているところを見てしまったね…
君も、殺すか
」

「あ、ああ…」

はつねは、怖くてしやうがなかった

「何も、そんなすぐに殺さないさ…

私にも、考えがあつてね…

越水七槻に、君の誘拐するって言って

彼女に君の命をかけてを挑戦をするのさ」

はつねは気が戻った

「私はともかく、
なっちゃんに、何の恨みがあるの？」

「別に　ただ単に、探偵ってうざいから殺したいんだよ…
まあ　そうゆうことだから
」

犯人は、その後、はつねを誘拐した

卒業は嫌＊ 揺れ動くはつねの想い（後書き）

こんな脇役ばかりのつまらない話ですいません。
完結する前には、コナンや新一も出します

狙われたはつね&a m p;

怒りの七槻

卒業前の誘拐事件（前書き）

はつねが、誘拐されてからの話です

狙われたはつね& a m p;

怒りの七槻 卒業前の誘拐事件

越水七槻家★★★

「はつね どうしているのかな？」

七槻は、はつねの心配をしている

いてもたってもいられないほど…

1分1秒早く

はつねの様子が知りたくてしょうがない

とりあえず はつねの携帯電話に電話を試みた

*****#####

つながった！

「もしもし…」

はつね どうしたの…？」

この瞬間、

電話の持ち主の反応に七槻は違和感を感じた

「くくく．． 越水七槻さんかね．．

これは これは、好都合だ！

君に挑戦する絶好のチャンスだからね．．」

「挑戦？ ボクに何の挑戦するのかな？

それに、なんで君がはつねの携帯電話を持っているんだ？

はつねは、どこ？」

「まあ、あせるではない 君の親友の

彼女を、この私が誘拐したのさ。」

「誘拐？」

「そうさ 返してほしければ、私の正体を暴け！」

「ちょっと、卑怯だよ

そんな全く手がかりがないのに 調べようがないじゃないか！！！」

「ハハハ なんとでもいいたまえ。

手がかりは、自分で見つけるだよ」

七槻は、正直困った

どうしようかと思った時……

『なっちゃん，

今、私はどっかの倉庫に、入れられたのよ　犯人は　…、

はつねは、電話に向かってこの状況を話そうとする

ベシッ！！！！

犯人は、はつねを叩いた

「余計なこと言うな！
殺されてーのか。」

それでも、はつねは七槻に犯人に対する手がかりを言おうとした

『犯人は、　眼鏡をかけた　…

ベシッ！！！！

『男で…　学校の

ベシッ！！！！

「もういいよ…

ボクが自分で手がかりを見つけるから
はつねは無理　しなくていいよ」

『いいのよ！

なっちゃん、　いつも私はあなたに助けてもらった！

たまには、私もなっちゃんのために役に立ちたいからね：

犯人は学校の先生　だよ

とりあえず、犯人について語る

また、叩かれる

ベシッ！！！！

「無理しなくていいんだよ！」

何度か叩かれているが　それに耐えながら、

『犯人は、学校の先生だという根拠は

電話に向かって話す

わ、私が誘拐された時偶然見えてしまったの

パソコン室のあるパソコンに

学校の金の横領のデータががしっかりと うつつていたわ

つまり、犯人は眼鏡のかけた男で学校の先生ってこと ー」

はつねは、犯人にしつこく叩かれ、ついには

倒れた

「はつね！！！はつね、はつねー」

七槻が 何度よんでもはつねは 倒れたまま ー

「ハハハ・・・最後に彼女と話すことができて良かったんじゃないかね・・・」

その言葉に七槻はものすごくムカついていた

「お前は、捕まえてから絶対にぶん殴るからな・・・」

七槻にしては珍しいことを言う

よほど、怒っているんだろうな…

今回の事件でわかることは

学校の先生で 眼鏡をかけている男の人
そして、その時間アリバイのない

それに当てはまる人が犯人だ

七槻は、犯人を見つけることに燃えている

狙われたはつね& a m p;

怒りの七槻 卒業前の誘拐事件（後書き）

最後が、いまいちになりました。

七槻らしくない言葉を言ってしまった

次回、 犯人についての越水七槻が、推理することになっています
次回はまともな推理になるようにしたいです。
後、評価お願いします

推理（前書き）

犯人についての推理話です。

ちなみにこの話は原作とは全く関係ないです。

推理

福岡警察本部

★★★

七槻は知り合いの刑事にはつねの誘拐事件について電話で話す

「何？はつねちゃんが犯人に誘拐されただと．．」

「ええ．．はつねが、学校に戻ってパソコン室に入ったら
何者かが誘拐したらしいです！」

「その何者かについての情報はるか？」

「ありますよ。犯人は学校の先生で 眼鏡をかけている男の人だっ
てさ．．

はつねが電話でボクに言ったんだ！」

「それで、なんで はつねちゃんが学校に戻ったのが問題だな
それに

犯人が何をやっていたかをはつねちゃんから聞いた？」

「はつねが、なぜ学校に戻ったのかはわかりません。 あまり詳し
くはしりませんが悩み事があるみたいです

何かは知らないけど．．

その悩み事を考えるために学校に来たと思います。

後、犯人は学校の金の横領のデータを見られたので口封じに人、一人殺してしまいました」

「どこまでも 許せねえ犯人だな……!!」
それで、なっちゃん
犯人は絞れたのか？」

「ええ…… 何とか該当者3人います

一人目は、 佐藤毅

教科は、体育

2人目は、 佐々木明良

教科は、英語

3人目は、 吉田信秀
教科は、技術

この3人の中に犯人が、います！」

「何かその3人についてわかったことはあるのか？」

「ええ…… 刑事さんに電話する前、学校の校長に3人の先生のアリバイを聞くように頼んだのです。」

「それで．．そのアリバイは？」

「一人目の佐藤毅先生は、その時間、学校の近くの公園でタバコを2、3本吸っていたみたいです」

二人目の佐々木明良先生は、古本屋で本の立ち読みした後本を一冊買ったらしいです！

三人目の吉田信秀先生は、ロー〇ンっていうコンビニの駐車場で書類を整理していました。」

「うーん．．どれもアリバイとして立証できないなあ．．証人はいるのか？」

「いいえ いません！」

「そうか．．！！」

つまりその校長が言った証言の中に犯人を示す手がかりがあるのか：

まあいい！

我々も捜査するか！」

「ちょっと．．待ってください！

下手にパトカーに乗って捜査したら

犯人に警察が来たことがわかってしまう．．

もちろん犯人は騒ぎに乗じて、逃げるにちがいない！

だから、こっそり 慎重に捜査しなければいけません！」

「わかった！ で．． なっちゃん、
君は今、どこにいるんだ？」

「私の高校です。

〇〇高校っていう高校の校門前！」

「ああ：今いくぞ」

その刑事さんは、自分の車に乗って、七槻の高校に向かった

七槻はその時間 刑事さんを待ちながら、犯人が誰かを考える
1分1秒： 早く犯人を見つけなければ

はつねが殺される

そんな状況で七槻も焦りながら、推理した。

とりあえず、佐藤先生が犯行当時にと いう ■ □公園で
調査をする

その公園のベンチの周りには、複数のタバコのゴミが落ちている

それと、辺り一面に雑草がはえている

七槻は、そのタバコを調べる

（いろんな種類のタバコがあるみたいだね．．
ほとんどのタバコが乾いているね： この2本が妙に湿っているようだね！）

そのタバコを観察して 推理をする

（しかし、佐々木先生と、吉田先生の
アリバイは調べようがない
なあ：

どうしよう！！）

佐々木先生の場合は、古本屋の店員さんが彼が来たことを覚えていれば、アリバイは立証できるのになあ：！

吉田先生の場合は、コンビニの駐車場にいたなら、誰かが彼が車に乗っている姿を覚えていればアリバイは立証するのに：

七槻はアリバイの立証ができなくて困っている

「ハア：～：～！！」

とため息をつきたくなるほどである

ただ七槻ははつねに

（なるべく早く犯人を捕まえて、ボクが助けるからそれまでの間が
んばって耐えていて：！）

そう心の中で祈念することしかできない

はつねの命がかかっているこの状況一瞬たりとも、あきらめず必死
に自分で推理を試してみた

何分が、七槻が考えている時、福岡県警の刑事さんが公園の方まで、
来た

「おお： なっちゃん、事件についてわかったことはあるか？」

「あっ：はい。

一応！」

「遅くなっちゃって悪いな：

その間にも校長の知り合いって名乗って 吉田先生と佐々木先生に
ついて調べていたんだ」

「それで、何が分かたんですか？」

「佐々木先生はなあ、彼の買った小説を読ませてもらったんだ
紙袋に嚴重にしまっせあってな：
奴は前もって本を買ったふりをしている可能性がある！」

それにしても、レシートも入っていたぞ
吉田先生については、自分の部屋に書類がたくさんあって 部屋に
入りづらいんだな：

後、車の中にも大量に整理してある状態で書類が置いてあった」

「その書類は、車のどの辺りにあった？」

「2列目の席に置いてあった
ちなみに、大事な書類らしい！」

：！！そうか！！わかった．．

と言わんばかりの顔になった。

公園に大きな風が吹いてきた気がする

（なんだ．．ちょっと考えればわかるじゃん！）

犯行可能な人はあの人．．

はっね、犯人がわかったよ…

絶対に助けるから．

推理（後書き）

やっと投稿しました（＾－＾）／
この話はとりあえず考えてありますが、連載中の3作品が考え中です。

七槻には、犯人がわかりました（＾Ｏ＾）／
次回には、犯人がわかると思います！

ヘンな推理になってしまいうような気がして不安です（ノ・。・）
評価お願いしますm（＿）m

消去法（前書き）

ついに誰か犯人かわかる・・・（＾Ｏ＾）／
七槻の推理ですが、ちよつと違うような気がします！

消去法

事件を解けて、自信満々な七槻

「なっちゃん、
何かわかったか？」

「ええ… わかりました。」

刑事さんが見つけた手がかりのおかげでね」

「えっ どういうことだ！ 犯人は、誰なんだ？
それに佐藤先生だけ何も調べていないが、彼が犯人だという可能性
はないのか！？」

「いいえ…」

佐藤先生は、犯人じゃありません！

なぜなら、ボクが、タバコを調べた時 2、3本新しいようなタバ
コが落ちていました。

他のタバコは、もうすっかり古びた感じになっているのに

新しいタバコが、2、3本しか落ちていないということはこれは、
本当に犯行当時にタバコを吸っていたということですよ」

「そうか!!」

犯行をしていたらタバコを公園にわざと捨てることも無理だということか!!

でも、その新しいタバコは誰か別の人が吸っていると可能性もあるが・・・」

「それは、ないです。

そんないつ誰がタバコを吸うかわからないのに、そんな偶然にけるなんてありえないです!

それにこの辺りは、普通に人が少ないしね・・・

もし、仮に共犯者がいて、犯行当時にタバコを吸っていたとしてもタバコなんか 警察に調べられるに決まっている

そんな失敗する可能性がある佐藤先生は犯人じゃありません・・・」

「じゃあ、犯人は、佐々木先生か?

だってよ あいつ古本屋で本を買っていたんだぞ!

普通、古本屋なら本にカバーがついてないから立ち読みするのに・・・

その時間に本を買っていたというアリバイを示すための策なんじゃないか?」

「いいえ… それも違います！」

本を入れるビニール袋には 本と一緒にレシートが入っていますよね…。」

「ああ… そうだけど、それが事件と関係あるのか？」

「レシートには、買った商品が記入されてますよね…!!」

「うん…!」

「それと、その商品を買った時間も記入してあるのです…。」

「!!!!!!」

(そうか!!!)

「レシートには、時間が記入してあるってことは、そのレシートが犯行時刻のものかがわかるってことか!!」

そのレシートが、犯行時刻とは、違う時間だとしたら、レシートを抜いているはず…。

つまりアリバイ作りが、本を買ったことなら、レシートは入れる必要はない」

「そう わざわざ本と一緒にレシートを入れた佐々木先生は犯人じゃないやありません。」

ボクに、挑戦するつもりのか犯人が、そんな単純なミスはしませんからね」

「ま、まさか・・・ 犯人は消去法で・・・」

七槻は、何もかもわかったかのように勝ち誇った！

風が、また大きく吹いた！

嵐の前ぶれかのように・・・

「そう、犯人は吉田先生です。」

彼なら犯行当時の様子から、犯行可能です。」

「証拠は？」

「今のところは、ありません。」

消去法で彼しかありえないからです・・・それが、問題なんだけどなあ・・・！！」

彼ら2人は、吉田先生が、

犯人だという証拠をどうやってださせるかを考えている。

消去法（後書き）

ついに、犯人がわかりました。

なんかこれ推理か？という感じになってしまいました

犯人はわかったけど、証拠がないとなあ：

というわけで次回は証拠を見つけます！

それと次回は・・・

後こんな話を評価お願いします $m(u|u)m$

突然の現れた人・証拠は絶対に出させる・・(前書き)

いよいよ、通りすがりの・・

突然の現れた人・証拠は絶対に出させる・

九州・福岡県

新一は、蘭と旅行で福岡県に来た。

事件の予感がする・

＞新一のみく

そんな新一は、ホテルの近くの道を散歩している

なんか近くで事件が起こっているような気がして仕方がない！

殺人事件の起こった学校をずっと見上げる

その後は、

『学校の近くの公園で休憩をしたい！』そんな気分だった。

新一は、ただなんとなく公園に行った・・・

公園は、とても空気が重い・・・

七槻と刑事さんが、

吉田先生が犯人だという証拠を見つけだす方法が 成功するかどうかで、悩んでいる。

2人が、何か悩んでいることは、新一にはわかった！

「どうしたのですか!？」

(!!!!)

見知らぬ中学生が突然、

あまり人がこないようなこの公園にきて　いきなり自分達に話しかけてくるので

七槻は正直あせった。

「誰？　君は・・・」

「工藤新一　探偵ですよ・・・」

七槻は、何かを感じた

それと同時に辺り全面に広がっている雑草が揺れ動く・・・

「探偵・・・」

自分と同じ探偵・・・！

ただ、通りすがり会った人が・・・

そんな彼とは・・・

また、どこかで会うような予感を感じた

「オイ…中学生！
実はだなぁ…」

刑事さんは、事件についてや、今の状況などを全て新一に話した。

「なるほど…」

消去法で犯人は、吉田っていう先生になったんですね…!!」

「けど、証拠がないんだ…」

ボクたちも、犯人に証拠を出させる方法を考えたんだけど…」

新一に話す

（なるほど…）

「それも正しいと思います…！」

正しいと思えば、この証拠を出させてみるのも一つの方法ですよ…」

そうだ、一刻もはつねを

助けなければならぬ！

証拠を出させるのに失敗してしまうなんていつて、何もしなければ何も始まらない！

もう 決めた！

犯人に、絶対にボロを出させてやる

「わかった！ 犯人の家にのりこもう。

刑事さん、犯人の家に案内してください。」

「ああ： わかった・・・行くぞ！」

刑事さんは、公園の近くに止めてある車に新一と七槻を乗せて、犯人の家へ向かう

車のスピードは、ものすごく速い！

でも、事件を解いたのは遅いぐらいだ

はつねが、すでに犯人に殺されていたら・・・

その可能性もある

いや、ないとは 言えない。

でも、七槻は まだ殺されていないという可能性を信じている

（はつね、あと少し頑張って…）

何度も何度も七槻は

心の中で、はつねを心配をしながら、

『絶対に助けけだす』と決心した

やっと、犯人の家に着いた。

家に訪問する前に、3人は、絶対に証拠を出させ、

そして、殺人を起こしてもなんとも思わないそのいかれた頭をぶん殴ろう

そう 誓った。

冷たい風が吹いてくる

早いはずねを助けなければ・・・

「作戦通り、ボクは、家の前で残るから
2人とも、犯人にすきを見せて、殺されないでよ・・・」

「ああ… なっちゃんわかってらあ・・・」

「絶対に生きて帰ってくるから・・・」

2人は、それだけ言い残し犯人の家へと、一歩踏み出して・・・

ピンポーン・・・♪

この何気ないピンポーンに、

犯人は、約10秒ほどで自分の家の鍵を開けた

家に入った瞬間

これからが、勝負

一瞬たりとも、絶対に見逃してはならない！

その意気込みで、慎重に家の中へと入った・・・

突然の現れた人・証拠は絶対に出させる・・（後書き）

犯人の証拠を見つけますって言ったのですが、これから犯人の家に
入って証拠を見つけるところです。

証拠の話で長くなってすいません m () m

今のは、証拠を出させるための作戦を考えていたのです

その作戦は、次回行います

そんなたいしたことじゃありません。

作戦開始♪(前書き)

証拠は、本当にたいしたことありません。

作戦開始♪

「なんだ！校長の知り合いの人じゃないか
次は、子連れか？」

「ええ …この中学生は、私の知り合いでね！！
一緒についてくるって言ったから…
しようがなく連れていったのですよ…」

新一は、不機嫌そうだった。

（誰が一緒に行きたいなんて言ったんだよ…）

「まあ、よい 上がってくれたまえ…！」

2人は、犯人と共に
部屋に入る。

「ここが、私の部屋だ！」

その部屋は、書類で埋めつくされている。

はっきりいって、とおりにくい！

「茶、用意したぞ！
のみたければ、テーブルの上に、置いてあるからな…」

黙って、茶をもらう2人・

一言も、会話のない

今、部屋全体そんな沈黙の世界になっている。

それも数秒後、打ち碎かれる

(オイ… 実行してもいいか?)

(ああ… いいぜ!)

作戦を実行するみたいだ

刑事さんは、なにげに、茶を飲むふりをして、
湯のみを犯人の方に落とす。

「あっちいーく…」

犯人は、叫びだした
ズボンが濡れた

急なハプニングが起きたにも関わらず、
刑事さんは、冷静沈着に、

犯人の気をしずめようとする。

「すみません！

大丈夫ですか！！

ちょっと、一階に下りて

タオルを持っていけますので、一緒についてきてください！」

（なんで、オレが、犯人に

『すみません！』

なんて謝らなければいけねえだよ……！）

そう思いながら、刑事さんは犯人と一緒に一階に、タオルを取りに行った

その間

残った新一は、

証拠が、この部屋にあると確信して捜査を始める。

（オレの推理が、ただしければ 証拠は見つかる。）

この部屋の何から何まで、探している。

（犯人が、この部屋に余計な書類をたくさん置いているのは、部屋を調べにくくするため。）

部屋を調べにくくするってことは、
何か調べられると、まずい物が、あるってこと・・・

それと、犯人は誘拐する前に 撲殺をしていたから、 犯行当時着
ていた血まみれの衣服がこの部屋のどこにあるはず・・・

それが、自分のいない間に証拠品が見つかったらまずいので、
彼は、この部屋で、茶を入れるなどの作業をしていたということか。
・

隠れていて、いかにも一番怪しそうな
タンスの中を調べて見た

すると そのタンスには、
犯行当時着ていたと思われる
血まみれの衣服があった

（なるほどな・・・ この衣服の血液を調べれば、 確実な証拠になる
な・・・

それに、血まみれの衣服を持っていることじたいおかしいけどな・・・
！」

犯人と、刑事さんが、2階に上がってきた。

「オイ・・・ 何人の家の中を探っているんだ・・・

しかも、何だ！

その血まみれの衣服は？」

「とぼけるんじゃないっ！ てめえが、学校で殺人を起こした時に浴びた被害者の返り血付きの服じゃねえか．．！」

「そうだ！ こちとらすでにお前が、犯人だとは、わかっているんだよ．．」

後ろから、今まで

『校長の知り合い』だとだましていた刑事さんが、言った。

しばらく黙り込んだ犯人

でも、すぐに開き直った．．

「ハハハ．．．

バレてしまったらしょうがない！

当然 2人とも死あるのみ．．

よかったなあゝ

1人であの世いきにならなくていいからさ．．

仲間なんだろう？

どっちが、先に殺されたい？

希望どおりにしてやるよ：！」

吉田先生の表情が、変わり 手には、

ナイフを持っている。

2人は、犯人の迫力に驚くふりをして、一階の台所に行った

「さて！ よくも私のズボンを濡らし、

罠にはめやがって・・・

許さん！ 消えろ：！」

ナイフを持って、2人に突っ込んでくる

背後からの存在に気づかないで・・・

そう背後からは、

バレーのボールが、投げとんでくる。

後ろを見渡すと、

そこには、 家の前で待ち伏せしていた

七槻の姿があった。

あまりにも強烈なアタックだったので、

犯人は、一度気絶した・

「ありがとう！」

犯人を誘導してくれて・」

気絶したが、一発だから、なんとか耐えていた

「お前もいたのか!!」

越水七槻

後、校長の知り合いって言ったヤツもこの女のグルだったとはなあ
…!!」

再びナイフを持って立ち上がる。

刑事さんも飛びかかる。

七槻に、やられたショックの強い犯人は、また倒れる。

が、またすぐに、起き上がる

「く、くそ・まずは、お前からだ

越水七槻!!!!

あの世に逝かせてやる!」

犯人は、七槻を集中的に狙う

そこには、必ずスキがある

それを新一は待っている

七槻は、襲われる直前に、

ボールを新一にパスした

受け取った後すぐに、

犯人の後頭部を

狙ってボールを蹴った。

犯人は途中ボールがくることに気づいた。

でも、遅い！

気づいたところには、もうボールが当たってしまった

さすがに、犯人も

新一& a m p; 七槻の

強烈なアタックとキックには耐えることができず、

地べたに倒れてしまった．．

作戦開始♪（後書き）

これで、本当に証拠を出させました。

この話のアイデアは、すぐに思いつきますが、

『工藤新一邸〜音楽の教室・』

は、ちよつと思いつきません。

だいたい話は、考えていますが、かけません！

関係ないですね！！

それは、さておき 次回あたりはつねを助ける予定です

助けられるかどうかかわからないけど、こんな話ですけど評価お願いします。

っていつもそればかりですね！！

もう頼ったりしない．．
(前書き)

はつねの気持ちも表しています

もう頼ったりしない．．

監禁された倉庫

口にガムテープをつけられた状態で
手首を縛られているはつね、

彼女は、足をバタバタして、しっかりと縛られたロープに抵抗する

ねえ．． なっちゃん

こんな私を助けてくれるかしら：

また、助けてもらうことになるのかな？

私は、なっちゃんの役にも たたず

ただいつも助けてもらえばっかり．．

私は、なっちゃんを助けていないのに．．

自分では、何もできない私

正直、卒業後どうしようか 悩んでしまう

将来のことさえ、なっちゃんを頼ってしまう

なっちゃんを頼っては、いけない！

もう卒業したら　これからのことは自分で、解決しなければなら
ない！

それが例えせれんお嬢様の薬に溺れたという疑惑でも．．

それが、嫌で、卒業を拒んでいた自分

卑怯だ！

確かになっちゃんなら、

せれんお嬢様を止めることが、できるかもしれない！

でも、お嬢様は憧れの人だから私が、止めてみたい．．

私のような人が、メイドになって、

せれんお嬢様につかえるなんて

ありえないけど．．

ふっ　私は、その夢を実現する前に

死ぬのかな．．

死ぬのは 嫌だ!!

ごめん… なっちゃん…

これだけは、お願い!!!

私を助けて…

こんなに助けてもらっているのに

助けてあげることができない

情けない私だけど

わがままだよね…!

わかっている

わかっているけど…

これからは、自分で生きてゆく姿をなっちゃんに見てほしくって

最後に、私の頼みを聞いてほしい…

なっちゃんは、こんな頼み事を聞いてくれるかな…

後ね… なっちゃん

私、誘拐されてやっとわかったよ：

なっちゃんに何でも助けてもらったら
ダメだって

このまま だったら仕事のことで、
いつもなっちゃんに助けてもらってばかりで、
自分では、何もしなかったもんね：

なっちゃんにも、 名探偵になりたいという夢が、あるのに：

私の助けなんてやっていたら、

なっちゃんの夢の邪魔をしてしまう：

そんな 自分の都合を押しつけるなんて
最低だ！

最後に：

なっちゃん、

助けてください！

はつねは、涙がでてしょうがない

そのままずっと泣き続けた

犯人の家★★★

犯人は、気を失っている間に
ロープで縛られている

今、なんとか気を取り戻した。

「さあ： はつねは、どこの倉庫にいるの？」

「さあ〜どうだか」

縛られているヤツが目を横にそらす

「へえ〜 そうか!!」

なら、お前の腐った頭 もう一度蹴らせてもらおうか!!」

新一は、ボールを踏みながら、
ける構えをしている

あれは、思いだただけで恐ろしい．．

(げっ あんなのをもう一発かよ．．
勘弁してくれ！

犯人の顔は、みるみる青くなる！

「わかったよ：

△◇って言う倉庫の中に閉じ込めたんだよ．．」

「△◇って言う倉庫？

わかった…！

とりあえず、ボクと君でその倉庫に行こう！

まあ、とりあえず刑事さん車出して！」

「あの、 オレは、 倉庫についた後どうすればいいんだ？」

「刑事さんは、車の中で、

犯人が逃げるかもしれないから

犯人の見張り お願い．．」

（！！！！！）

「っっていうか 逃げねえよ．．

ロープできつく縛られているのに．．」

車を出して乗った後、犯人に道を教えてもらいながら、
倉庫へ向かった

七槻は、また、

『はつね頑張って』

そう心の中で思っている。

あれから、どれだけの時間が立ったのだろうか

ずいぶん、遅くなって もうすっかり夜中の3時になっている。

そんな遅い時間になっても 七槻は、
はつねの生を最後まで信じている

やっとのことで、倉庫に着いた

七槻は正直緊張した．．

おそろおそろ倉庫の扉を開けた

『はつね無事でありますように．．』

七槻は心の中で祈念した

開けた時、はつねの姿が視界に入る

無惨な姿だった。

とりあえず2人でガムテープをはがして、ロープをほどいた

息ぐるしそうにはつねはせきをした

「ゴホッ、ゴホッ」

「大丈夫？ はつねごめん…
助けるのが、遅くなってしまって…」

はつねは、助かった
生きていた。

そのことにほっとした。

気になることが一つある。

はつねは、何を悩んでいるのだろうか!!

悩みを考えるために、学校に戻ったことは、
わかるけど

何を悩んでいるかはわからない

もう頼ったりしない・ (後書き)

また、投稿しました

やつとはつねが、助かりました！
時間がないので手短に・

評価お願いしますm(u|u)m

それぞれの想い↓そして、それぞれのつらさ(前書き)

七槻や、はつねの心情についてです

それぞれの想い↓そして、それぞれのつらさ

なっちゃんが、自分を助けてくれた・・・

それが、嬉しくてしようがなかった。

自然に涙がながれる。

泣きやみたいけど、泣きやめることができない。

「はっね どうしたの？」

あと、何か悩んでいるの？

学校に戻って考え事していたんだろ？

そんな1人で悩んでいないで、ボクにも話してくれたっていいのに。
」

「ごめん・・・！」

私、なっちゃんに頼らずに、悩みを解決しようと思って・・・」

悲しそうな顔をしている

「いつもなっちゃんには、助けてもらってばかりだったよね・・・

なっちゃんにも、話づらかったんだ・・・」

七槻は、どんなことを言い出すか、気になっている。

新一は、とりあえず2人の会話を聞いている

「せれんお嬢様には、

薬に溺れたというウワサがあるのよ：

本当か　どうかは、わからない！

ウワサであってほしい・・・

私にとって憧れのお嬢様なのよ：

そんな憧れの人が、薬に溺れたなんて

信じたくない・・・」

そうか！！

薬に溺れたという事実かもしれないことを受け入れるのは、
つらいんだ・・・

はつねが、ものすごくその人に憧れて

いたのなら・・・

ボクには、きつとその気持ちはわからないだろう．．

でも、今やっとわかったよ：

ボク はつねが、誘拐された時、

つらかったよ：

いつ、

はつねが殺されてしまうか

不安だった。

まだ、生きていると
信じていても、

助けるまで、不安だった．．．

何人もの 友達の中で

唯一親友と 呼べる

大切なはつねが、

死んでしまったら

もう、ボクは、

一生つらかっただろう．．

七槻は、涙目だった。

今にも、泣きそうなぐらい．．

でも、感情が、でも

決して、涙を見せなかった

「なっちゃん、どうしたの？」

「何でもないさ：

はつねが、助かってほっとしただけさ：

七槻は、苦笑いをした。

何 強がっているんだろう．．

ムリに笑ったって意味ないのにさ．．

新一は、2人の友情を

ずっと見ている。

自分のことかのように・

夜明けが近づいている

つらいことを覆い隠す

そんな光が、2人を
包んでいくように・

「ねえ・・

はつね、ボク絶対に君を死なせたり

しないよ・・。

危険なことにも、

遭わせたりしない・・

困ったら 助けに行くからさ・・。」

明るくなって日がでてきたせいかどうかわからないけど

光に満ちあふれたように見える七槻・

はつねには、うらやましく思える

勇気を持って七槻に

一言言いたい！

(ありがとう)
って一言・

なかなか、素直にならない

でも、この時は素直になった！

「なっちゃん、

ありがとう！

その いつもなっちゃんには、助けてもらってばかりじゃん

後、ごめんね…

私、なっちゃんのためになんにもできなくて

それと、自分で、せれんお嬢様の疑惑を解決したいの」

「いや、 はつねのおかげで、

犯人が、絞れて、

事件が、解決できたんだ

はつねは、充分ボクを

手伝ってくれた…

感謝しているよ…

ありがとう！」

明るくなっていくと、

さらに2人の友情が深まる。

今、暗い倉庫の天井から、

光が見えた．．

それぞれのつらい想いは、

全て吹っ飛んでいく

そんな光が2人を

包んでいる。

朝方になって、

新一は、安心して

泊まっているホテルに 戻るため、
タクシーを拾って

1人で、去った。

ホテルに戻ったら

当然蘭には、

きつく説教された。

「ころゝ 新一！！！」

こんな夜中にどこほつつき歩いていたのよ！

心配して探していたのよ！！！」

蘭が、怒っている

まあ、当然だな…

（ハイ ハイ！！）

呆れて返事をする気分だった。

新一は、横を向いて、
南の探偵の七槻の

ことを思いだした。

「ふっ 南の探偵か・・・
名前聞いてねえな・・・」

とつぶやいた。

「何 言っているのよ・・・ 新一！」

呆れたように口調で、 話す

この事件について、
蘭は、何も知らない

新一も、後ほど

七槻と、会うとは、
知らない！

「コナンに、なってから、会うけど・・・
そのころは、今の事件に七槻が、関係していることなど
忘れている。」

七槻と、はつねは、
誓った。

『困ったらお互いに助けあおう』

って・・・

『残り少ない学校生活を充分に楽しもう
後、卒業しても、
親友のままだよ』

それを言い残して

彼女たちは、

充分に光のない倉庫からでて、

光が満ちあふれる外の世界へ

また 歩み始めた

これから先は、

地獄のような事件が、
待ちうけているが、

そんなことも気にせずに

光の世界へ一歩踏み入れた・・・

それぞれの想い↓そして、それぞれのつらさ(後書き)

ついに、誘拐事件解決しました。

えっと 書き忘れたことが、あるような・

そろそろ、卒業の話ですね(´ーへ＊)

とりあえず、新一は、通りすがりです。

後、評価の方もお願いしますm(・・)m

何気ない授業最後の日。↓そして、はつねのほほ笑み（前書き）

事件後の何気ない授業最後の日の話です

何気ない授業最後の日。↓そして、はつねのほほ笑み

あれから、彼女たちは、事件のことなど何もなかったかのように
学校生活を送っている。

そうそう、あの事件の犯人は、
ちゃんと捕まった

今は刑事さんに

一日中、尋問されている

ボクたちは、いつもどうり

2人で学校に向かう。

ボクとはつねで誓った！

残りの高校生活を

ムダなく過ごそう・・・

「なっちゃん

良かったね… 今日の授業体育があるよ…」

「えっ、 本当！

で 内容は？」

「もちろん、なっちゃんが好きなバレ―だよ…」

「やったあ〜！」

なっちゃんって好きなことには、素直だなあ…

でも、なっちゃんのおかげで

とりあえず悩みも吹っ飛んだ

今、私は幸せだよ…

本当にありがとう…

学校★★★

七槻は、クラス中に注目される。

「なっちゃん　すごいよ：
また事件解決したの？」

「将来、名探偵も夢じゃねえな．．」

などの日常的な会話が、たえず続く

誘拐事件に遭ったのはつねも

みんなに注目される。

「はつねちゃん

大丈夫だった！

犯人に誘拐されるなんて．．」

「うん!!大丈夫

はじめは、つらかったけどね：

なっちゃんが、助けてくれて本当に助かったよ．．」

はつねは、笑顔に満ちあふれている

七槻に助けてもらって

今現在ここにいることが、幸せだ

いつものはつねとは、違う表情だった。

体育の授業★★★

運動神経が、良い七槻は、

バレーでは、大活躍

今日の授業は、バレーのリーグ戦

七槻が率いるチームは、強い 強い

相手に1点も取らせていない！

さすがなっちゃんだ！

はつねは、感心した

そして、七槻が楽しそうに、バレーをやっているのを見て、

自分のことのように嬉しかった！

バレーのチームで、

はつねも七槻の同じチームである。

七槻のバレーをやっているところが

目の前で、見える．．

そんな光景が

はつきりとわかる。

そんな光景は、最後の思い出になる．．

彼女は余裕な笑みで、

ボールを ネットの方へと

飛ばした

敵チームが、ボールを受け取ることができないように 回転を速く
して、

とどかない距離を狙い、

点数を1点ずついれていく．．

そして、 ネットの境界線をこした

ボールは、静かに地面に落ちていく．．

そして、また1点

の点数が、

七槻のチームに入る。

その一瞬のような出来事が、

はつねには、異様なほど焼きつく

当然だが、七槻率いるチームは、
みごとに勝った。

七槻のアタックは、そう簡単には、
受け止めることは
できない

彼女の運動神経の良さは、
もう感動してしまう。。

彼女の体育の授業の活躍ぶり
は、前から知っていたけど・・・

本当に、卒業前の
いい思い出になった

ほかの科目は、普通に終わった．．

別に、思い出とかそういうのは、

なかった

ただ視界には、なっちゃんが

眠たそうに授業を受けている姿は見えた

相当疲れているみたいね…

そりゃ 探偵の仕事で

忙しいもんね…。

七槻を見ていると、いろんなことが、

しみじみと感じる

いつの間にか、授業は 全部終わっていた

後は、H R だけ…

話は、どうやら 明日の卒業式についてだね…

はあゝ長いね…

七槻とはつねは呆れて話を聞いていた

でも、学校生活最後の先生の話だから、眠たくなるが、

全部終わるまで、我慢して話を聞いていた…

先生が、しつこく話をしていていたので、

HRが、終わったのが、遅くなった！

下校★★★

いろんな人が、校門をでていく…

七槻たちも校門を出た

学生の間は、校門にはいるのは、明日が最後だろう…

明日は、卒業前か！！

ふと、学校の方を見上げる

「なっちゃん、
いよいよ明日ね…!!
卒業式」

「うん!!　　そうだね・」

「この学校　校則厳しいから、明日は特に制服とか
気をつけるんだよ!!」

「う、うん!!」

今日も、天然の茶髪で注意されたもんね…」

下校途中は、明日の卒業式の会話している

彼女たちは、授業最後の日は、

とても思い出に残った

みんなにとって、いつもどうりのことが彼女たちに

としては　とても楽しく過ごした

かけがえのない1日になった

何気ない授業最後の日。↓そして、はつねのほほ笑み（後書き）

すいませんゞ（´ー´）

今回は、いつもより文章に不安があります。

七槻が、運動神経が良いっていうのは、私の想像です

ちなみに、バレーが、好きなのは、見た目そう見えるからです

（私だけだけかな．．（ノー．．））

体育の授業の話は、七槻が、運動神経が、良いことをアピールするため．．

勝手ですが、評価お願いします☆彡m（┐┑）m

卒業式前日の夜（前書き）

せれんお嬢様についての話も、あります。

卒業式前日の夜

いよいよ 明日だね．．

別れと希望の第一歩の

卒業式．．

なっちゃん、

私が、ついにせれんお嬢様のもとで、

働くんだね…！！

ついこないだまでは、

なっちゃんに助けてもらわないと何もできない自分

いつから、自分がメイドにでも、

なれる気でいたのだろうか！！

自分の部屋の、ダンスから、なんかピアスを取り出した

そのピアスを、ずっと見ている．．

昔、せれんお嬢様から、もらったピアス

あのころは、嬉しかった．．

たった一回出会ったあのときは．．

） 回想 ）

幼いころ四国に、旅行に行った！

近くを散歩した。

すると、

ラベンダーのニオイが、したので、

私は、気になった．．

香りが、漂うほうへ　よせられて

私は、つい　ラベンダー屋敷のほうへ

行った

ラベンダーの周りには、

1人の少女が、包まれていた

それが、せれんお嬢様・

私は、一瞬固まってしまった！

目の前にお嬢様が、いるから・

「どうなさいましたか？

あなた方は、誰ですの？」

憧れのせれんお嬢様が、私に話しかけた！

私のお気に入りのていねいな口調で・

緊張してしまう。。

「あ、あの 私は、ただの通りすがりですが・

お嬢様は、手に何を持っているのですか？」

お嬢様は、さっきから、

手探りで手に持っている物をさわっていた。

しばらく手探りで、黙っていた。

「あ、いや!!」

言いたくないなら、別に無理に言わなくていいですよ……」

ちょっと気を使ったつもりのはつね。

「しばらく間をあけて」

「ピアスですわ……!」

わたくし、ピアスに憧れて、

一度つけてみたくなりました。それで、一つ買ったんです!」

あの上品なせれんお嬢様が、
ピアスを持っている。

とても意外だった。

「わたくしは、お嬢様の身なので、

ピアスなどをつけたことが、

ないのです

一回は、つけてみたいけど

どうしてもためらってしまいます。

わたくしには、ふさわしくありません。。

このピアスは、あなたに差し上げます！」

お嬢様は、ピアスを渡す。

はつねは、お嬢様からピアスを受け取った。

その後、

せれんお嬢様は、すみやかに

ラベンダー屋敷に入った。

お嬢様が、屋敷に入った後、

私も庭を出た

親に

『何やっているの？もう．．
って、注意された。』

その後は、四国の旅行を楽しんだ

―回想終了―

はつねは、手のひらにしているピアスを見て、

せれんお嬢様との
思い出を

しみじみと感じている！

私は、今でも、忘れられない。

せれんお嬢様に会ったこと、

お嬢様にピアスをもらったこと

ピアスは、今でも大切にして

タンスの中に保管している．．

このタンスも久しぶりに、開けたわね．．

本当は、タンスなんかに保管せずに

今、ピアスをつけたかった

でも 校則が、厳しいからピアスなんて

つけたら

没収されて手元にかえってこないだろう．．

卒業後なら、ピアスをつけれる！

せれんお嬢様からもらったピアスが．．

ついに！！

卒業するのは、仲間と別れるから、少し寂しい．．

でも、私は、早くせれんお嬢様のために

役立ちたい…！！

「葉に溺れた」という

疑惑も、解決したい．．

そして、お嬢様にもらったピアスをつけていることを

せれんお嬢様にわかってほしい．．

七槻の家★★★

ボクは、これから、

探偵を続けるよ…！

人の命を助けることが、できる探偵に

なりたい．．

そんな名探偵を目指す。

特に、はつねを絶対に死なせては、いけない

かけがえのない親友だから．．

ボクが、卒業後のことを考えている間

はつねは、どうしているのだろう．．

同じように、

卒業後のことを考えているのかな？

今日の授業

いままでの中で、

一番楽しかったよ．．

はつねは、楽しかった？

ベランダの方にてで、

はつねと同じように
明日のことを考えている。

はつね．． 君も、
少し寂しいだろう．．

仲間とは、別れるから．．

ボクも同じだよ．．！！

クラスメイトと、

離ればなれになるのは、
嫌。。

でも、それも、決まったこと

みんな一緒になるはずが、
ない。

わかっていることだ

はつねは、今、明日の卒業式のこと

どう思っているのだろうか！！

高校生時代最後のメールを

はつねの携帯電話に、送った．

メールの内容は、明日の卒業式についてだった！

この夜、彼女たちは、

メールをたくさんした．

はつねは、せれんお嬢様からもらったピアスを、

大事そうに

ハンカチにのせて、
ずっとながめている。

明日は、いよいよ卒業式．

彼女たちは、

お互いに、卒業式前日の時の夜空を見て、誓った。

明日、また、合おう．．

卒業式前日の夜（後書き）

次の話が、いよいよ卒業式です（ーーへ＊）／
せれんお嬢様のピアスについての話は、もちろん意味があります（
＊。▽。ノノ。☆

評価お願いします m（　　） m

卒業式本番《前半》（前書き）

これは、卒業式本番の日です。。
下手な文章には、なっていました

卒業式本番《前半》

今日は、雨が降った

そんなに気にするほどの雨では、ない

小雨程度だ．．

みんな傘をさしている

悲しそうな卒業式になりそうにもある

今日は、いつもの朝とは、雰囲気が違う．．

別に、雨が降っているからじゃない．．

決して、気持ちが悲しかったり、暗くなっているわけでもない：

登校中も、みんな真剣な表情で、学校へ向かう！

七槻とはつねも、一言もしゃべらないで、

とつとつ、歩いている

今日は、卒業式．．

みんな緊張している

〈学校〉

塗れている傘をたたんだ。

窓から見える外の世界は、空も雲も暗くて、
景色が、全体的に暗いイメージがある

学校に入ると、

登校中の時とは、全く違う雰囲気。

雨の日とは、思えないほど。

みんなざわめきはじめた

教室の中に入った。

クラス中が、騒いでいる。

仲の良い人達が、固まって

いっしょにしゃべっている

大人気の七槻の周りには、

その他大勢の友達も

たくさん集まってくる。

ちょっと内気なはつねも、

他の大勢の人と、

自然にグループにとけ込んでいる

はつねは、学校に持ってきたピアスを

隠して心からせれんお嬢様に気持ちを伝える．．

せれんお嬢様，

あなたが、葉に溺れたなんて、

うわさ 私が、ウソだと証明してみます！

例え本当のことでも、
あなたを救い出します。

その前に私には、

高校を卒業しなければ、ならない

卒業式を無事に終わらせるという使命があるから。

卒業後は、もう一度見てみたい

忘れられたあの頃のように、

ラベンダーの花に包まれたような

上品なあなたを。

あなたは、本当にラベンダーの花を愛していた。

私もラベンダーは、好きですよ。。

まるで、あなたみたい

あたたかい香りを漂わせる花だから

私は、あなたが、のラベンダーを1つ1つに

愛情を込めて、育てている姿がみたい

それが、理想的だから．．

せれんお嬢様，

ああ…、

このピアスは、どうするば

いいのでしょうか

ピアスは、ハンカチにのせて大事そうに

している．．

一方、七槻達は、

しょうもない話題をしている．．

「昨日学校帰りにスカイフィッシュをみたよ。」

「ウソだ」

「本当だって、

昨日この目でしっかりと見たもん」

「そんなわけじゃないか

スカイフィッシュなんて、

この世に存在するわけないよ…!!

あんなの　ただのハエだよ…!

科学的に説明するとそんなところだよ…

ねえ…、はつね
って

（返事が、ない）

おーい…!!

は・つ・ねー」

「何？

なっちゃん…」

（何って…）

ボクの話聞いた？

ちょっとむかついた。

「はつね どうしたの？」

さっきから様子が変だよ…

今日は、卒業式だよ…！！」

「ううん… 別に、どうもしてないよ…！！
ただ ちょっと…」

「えっ、何？」

「ううん… 本当に何でもないから！」

（なに 焦っているのよ…！！）

ちょっと口をポカーンと、開けていた…

いけない いけない！

自分の世界に入りこんでしまった。

えっと… たしか…

スカイフィッシュが、存在するか

しないか　そういう話だったよね…

ヤバイ　ヤバイ・・・

全然聞いていなかった。

こうして話をしていると、

寂しくなりつつある

教室が、あたたかくなるわね…！

スカイフィッシュの話題は、
どうかと思うけど・・・

でも、暗い雨雲のことも忘れてしまうね…

今は、外の世界と違って、

気分は明るいわ・・・

担任の先生が、

教室のドアを開けた

「はい。 皆さん今日は、卒業式ですね。

いままでの練習を忘れずに 本番しっかりと

成功してください！」

みんなは、

（ハイ ハイわかりましたよ……！）

といったげな顔をしている。

それから、ああだこうだと

長話をして。

ハアハア 疲れるねえ……

あくびしている生徒もいるね……！！

ほんと、この先生長話ばかり……

生徒に嫌われるよ……

長話もやっと終わった。

「では、皆さん廊下にてで 並んでください！」

ふう やつと終わったか!!

みんなは、黙って廊下に出た。

早く体育館に行きたいんだけど．．

という気持ちは、あった

また、並び順の確認か!?

疲れるなあ：

でも、意外と早く終わった!

「皆さん、では体育館に行くので、

静かに入場してください。」

先頭には、先生が、
1人

その後ろには、そのクラスの生徒

並んで、大群のように静かに歩いている

体育館を入場する時、

雨の景色が見えてしまう！

体育館に入る寸前だった・・・

その時に近くから・・・

「キャーッ：」

という悲鳴が聞こえた。

七槻は、気になっていてもたってもいられなかった。

そのまま近くにある窓を開けて、

そこから、

飛び降りた・・・

そして、ダッシュで

走った。

しかし、当然だが先生に引き止められた。

「ち、ちょっと．．

越水さん．．

今は、卒業式前だよ：
戻ってください。」

「今は、卒業式より、
こっちの方が大切なんだ！
早くしないと．．」

そのまま走った

「越水さーん
戻ってきなさーい」

と言っても返事はしないし、
振り向かない。

「無駄ですよ。。先生！

彼女には、探偵の仕事が、

あるんですよ…！」

「そうですよ…！」

犯罪者を捕まえなければならぬんです」

「しかし、今日は、卒業式だ！」

「では、先生は卒業式のために

世間に迷惑な事件を犯す犯罪者を野放ししても、いいのですか！？」

この状況で犯罪者を捕まえられるのは、彼女だけです。」

卒業式なら後からだってできます！

どうか、今は、入場しないでください。

なっちゃんが、戻ってくるまで待ってください

お願いします。」

はつねが、代表で、
先生に頼む。

それに続いて、クラスメイト全員

『お願いします。』

それぞれ先生に、七槻のために、必死に頼む。

みんなの七槻をおもう熱意には、先生も負けて、
少し迷ったかのように、
かすれ声で話した。

「しょうがない．．

越水さんが、戻ってくることを信じよう．．」

こうして、みんな 七槻が、戻ってくるまで

体育館の前で待っている

卒業式本番《前半》（後書き）

今回は、いつもよりは話が長いですO（^ー^）O
余分な話もあったけど・

想像以上に話が長くなります。

後、評価お願いしますm（
）m

卒業式本番《中編》

体育館★★★

「校長先生

3年◎組ですけど．．

一名、越水七槻さんが、
事件が、あるっていつてどっかにいきました。」

「ふーん そっか

ってバカもん！！

何で、お前は生徒の好き勝手を認めているんだ

お前それでも教師か！？」

「すみません…！！

私も止めたんですけど．．

どうしてもって彼女が．．」

「えーい

言い訳など見苦しい！

とにかくお前は、生徒を 止めることが、できなかった。

ふっ まあいい！

お前のクラスは、最後にまわす

だが、それまでに彼女が戻ってこなければ、3年◎組は

卒業式中止」

「連帯責任ですか!？」

「そうだ!」

(連帯責任か!!! いたいな...
卒業式中止か!!!)

越水さんそれまでに戻ってきてくれよ...)

先生は、心の中でハラハラしながら、

彼女が戻ってくることを望んでいる

七槻は、 走る

悲鳴が、 あった方へと

1分1秒早く犯人を捕まえるため．．

やっと着いた．．

悲鳴は、 銀行から聞こえたのだった。

七槻は、 濡れている

足は、 ヒリヒリする

でも、 気にせずに、

銀行の中に入る

みんな一斉に七槻のほうを向いた。

そして、 驚いた表情だった！

ちよつと空気が重そうだ。

「すみません：

何があったんですか！？」

「ぎ、銀行強盗がきた．．

金を出せ って

拳銃を持って．．」

震え、かすれた声で、

悲しそうに伝えた

「つ、捕まえてください！

そして、金を取り戻してください！」

「どれだけ盗まれたのですか！？」

「一億円ほどです．．」

「一億円ほどですか．．
って高！！

後、犯行当時について詳しく説明してほしいです。」

「犯行当時ですか．．
あれは、たしか．．」

（回想）

突然、雨で塗れた大きなマスクをつけた男が、
拳銃を持って、

「金を出せ！！」

ださなかったら　てめーら全員殺すぞ．．！

さあ．．　どうした！

死にてーのか．．」

いつでも、発砲する気満々な犯人

ついつい腰が、抜けてしまう

「あ、ああああ… …！」

「何だ！ さっさと、金出せよー！」

一億ぐらいで、いいからよ… …」

犯人が、目の前にいてとても

怖かった… …

「あ、ああああ… …！」

金を出すにも、怖くて、出せない。

「何だよ… …

さっきからじれったい

さっさと、金を出せよー！」

そう言って、

近くにあるベンチを
蹴っ飛ばした。

そのベンチが、たまたま女性銀行員にあたりそうになって、思わず悲鳴をあげてしまった

これ以上犯人怒らせると

もっと銀行が、めちゃくちゃになりそうなので、

仕方なく一億を用意させた！

当然だが、一億なんて、そう簡単に用意できる物じゃあない

それをわかっている犯人は、

銀行員に要求をした

『一億用意したら

私が、いる場所に持ってこい！

持ってこなかったら

お前らの銀行に行って、

銀行員全員殺す！！

後、私の居場所を 誰にも、言うなよ…

とくに、探偵やサツには、絶対に言うなよ

言った場合も、死あるのみ

もちろん銀行員全員殺す

当然、連帯責任だ』

といい残し犯人は、雨の中走って、

どこかに隠れた

ー回想終了ー

「なるほど　つまりあなた達は、

犯人の居場所を知っているんですね……!!」

「ええ： 知っていますが、

言えません！

多分今は、隣り町の銀行で

強盗をやっていると思います」

（そうか！！）

七槻は、隣り町の銀行に行こうとする

そして、この町の銀行から、

去った．．

学校から電話があった

代表のはつねからで、一言

「みんななっちゃんが、学校に戻ってくると信じているよ…卒業式に間に合ってね！」

それだけ言い残して、電話を切った

また、雨の中走っている

濡れながら

隣り町まで．．

彼女は、ただひたすら走る

クラスメイトが待っているから．．

卒業式で遅れるわけには、いけない．．

こんな自分勝手な行動をするボクを

みんなは恨まずに

くるまで待っていてくれるから．．

車も、飛び越える勢いで、

隣り町の銀行まで着いた

また、銀行員全員を脅している

七槻は、血相を変えて、

銀行の中に入った。

「ちょっと．． 待った！」

そんなところで、銀行員脅して．．

拳銃を捨てな」

「フハハハ 何を言っているのだ…！！
てめーら全員殺すぞ…

最初は、お前からだ
お嬢さんよ…！！」

犯人は、七槻に拳銃を向ける

しかし、七槻は、ひるまずに

笑みを浮かべた。

「ふーん 口で言ってもわからないんだ！

バカだね〜！

素直に拳銃を捨てれば良かったのに

なら、しょうがない．．

そのバカな頭をボクが殴るとするか…！」

あらかじめ用意していたバレーボールを

犯人に向かって、思いっきり投げた

犯人は、一発で、倒れた．．

銀行員は、あっけない顔で、

驚いていた．．

それから、銀行員の人に犯人の見張りを頼み、

ボクは、学校へ向かう

足が、痛い！

ちぎれそうになるほど．．

痛い．．　ものすごく

でも、我慢しなければならぬ
こんなボクを待っていてくれる
クラスメイトのために．

今、みんながどんなおもいで、
ボクを待っているのだろう．

困っているだろうな：

卒業生1人たりないから．

クラス中が、ざわめいている．

「どうしよう．
このまま なっちゃん

戻ってくるかな？」

「今はくることを信じるしかないのよ．

大丈夫絶対に彼女はくる！」

（でも、遅すぎるだろう．．本当に、くるのだろうか！？）

痛い！

雨で地面が、滑る

走りにくい．．

でも、あとちょっとだ！

がんばろう．．

七槻は、ついに校門に入り、

体育館のほうまで、
必死に走る。

途中、グラウンドが、ぐちゃぐちゃで、

地面よりも走りにくいし

雑草が、邪魔になる

おまけに、足は傷だらけ…

走るのが、つらい…

そう思ったころ、

学校の中まで入った。

そして、 やっと体育館前まで着いた

卒業式本番《中編》（後書き）

こんなに長くなるとは思いませんでした（＾Ｏ＾）／
次は、卒業式の話です。。

評価お願いしますm（
）m

卒業式本番《後半》（前書き）

卒業式本番の話は最後です☆
シ

卒業式本番《後半》

やっと、学校に着いた

突然、みんなの前に姿を現した七槻は、

クラスメイト全員に
注目される。

みんなが、体育館前にいるってことは、

まだ、卒業式は、やってないみたいだ！

ちょっと ホッとした

って何ホッとしてんだよ…！！

今までみんなに迷惑かけたのに…

本当ならもう卒業式行っている時間じゃねえか…

みんなに謝ろう…

ボクが、 事件に首をつっこまなければ

この時間、 みんなもう体育館の中で、

他のクラスの卒業証書を

もらっているところも

見れたのに．．

「みんな、

ごめんなさい…！！

ボクの自分勝手な行動のせいで、

みんなを体育館前で、 待たしてしまつて．．

実は、 銀行強盗事件が、 あつたんだ！

それで、 その事件の犯人を

とらえて、 いたんだ．．

本当に、ごめんなさい…」

必死になって謝る七槻

みんなは、ボクを許して

くれないだろう…

そんなことは、わかっている…

でも、

ボクには、仲間を裏切ったままで、

いることが、できなかった。

「いいよ…!!　なっちゃんは、

探偵をやっているんだから…」

忙しいのは、しょうがないのよ…」

「そうだ そうだ

なっちゃんは、正義のために、

勇気を絞って、銀行強盗の犯人を

捕まえたんだ・

悪いのは、銀行強盗の犯人なんだよ・
なっちゃんは、むしろ良い事をしたじゃないか・」

みんなに、あたたかい言葉で、

なぐさめられている・

七槻は、またホッとした

ってまたホッとした！！

ちょっとした間盛り上がっていたけど

途中で、先生が、

話の邪魔をした

「盛り上がっているところ悪いけど、

体育館に入場しますよ……!!」

そう だった。

今、卒業式を行っている

最中だった。

ヤバイ… 校長は、

今どこまで、

卒業式をすすめたのだろうか!?

体育館の中★★★★

今は、3年■組の生徒が、卒業証書を受け取っている。

今は、■組の一番最後の生徒が卒業証書を受け取るのを待っている。

『○○伸子』

■組最後の生徒は、
○○伸子さんのようだ

『はい…!!』

返事をして、ステージに上がり、
卒業証書を受け取った

「3年■組

全員、卒業証書を渡しました！

最後は、3年◎組

担任○○信長先生」

校長が、その言葉をいい残すと、
体育館の辺りは、

シーンとした．

なぜならば、3年◎組は

まだ体育館に入場していないから．

「3年◎組は ◎組は

いませんか!？」

校長が、叫ぶ。

体育館中　ざわめき始める

「体育館にいないのなら、

◎組の卒業証書を渡すのは、

止めだ!!!

えーっと　これで、

卒業証書じゅ．．．．．

「ちょっと待ってください!」

体育館にいる人全員が、

声が、聞こえる方向に
向いた。

そこには、開いている体育館の扉の前に、

立っている3年◎組の生徒と

1人一番前に 堂々と立っている

担任の先生の姿があった！

「校長先生、

なんとか間に合いました

◎組も卒業式やらせてください！

今まで、他クラスに

迷惑かけてしまいました。

すいません…！！

心から、皆さんに迷惑をかけたことを

反省しています。

こんな情けないクラスですが、

生徒達には、

卒業させてやりたい

という願いが、あります．．

勝手ですが、校長先生、

どうか卒業式を続けてください！

彼らも、卒業式の練習は、

ちゃんと真面目に行っていました

私は彼らに、卒業証書を

渡したいという願いもあります。。

だから、

どうかお願いします…」

担任の先生は、

お辞儀をした

校長は、 歯を食いしばり、

弱々しくうなずいた。

「しょうがない！

越水さんも来たことだし…！

卒業証書だけ、◎組に渡すから…」

担任の先生は、

何か荷物をもちながら

前のステージのほうへ移動した

ゆっくりと歩く…

靴の音を響かせながら．．

その中には、雨の雑音も混じっている

いよいよ、卒業証書を受け取ることができる．．

立派な卒業式は、

できなかったが、

卒業証書を受け取るだけでも、

はつねには、嬉しい気持ちがある

今までのつらい思い出が、

報われたような気持ちになった．．

――回想――

はつねが、犯人に誘拐された時のこと

私は、初めて、

殺人をしている現場を見てしまった．．

もう　これが現実かどうか　疑った！

なっちゃんに、助けてもらおうなんて、
考える余裕もないぐらい．．

私は、どうするば
いいの？

目の前に殺人犯が、
いたとき

もう私は、生きて行けないと思った！

簡単に言うのと、

死ぬことを覚悟していた

私は、犯人が、誘拐しようとした時に、
無我夢中で、抵抗した．．

でも、無理やり睡眠薬をかかされ

力さえ失った！

あの時は、抵抗しようにも、

薬が効きすぎて

眠ってしまった．．

もう、この時点で、

私は、死んだー

という意識になっていた．．

そのまま私は、
ロープで縛られて

口に、

ガムテープをつけられた

それから、

犯人の車の中に入れられて

倉庫まで、ドライブをした。

私は倉庫の中に捨てられた

私は、倉庫の中で、起きたが、いつ殺されるか、

不安だった。

犯人に怯えて、

いた私は、誘拐事件が、

あったあの日が、

命日になるとしつこく思った。

――回想終了――

でも、良かった．．

なっちゃんが、私を助けてくれたから！

なっちゃんのおかげで、

今、私は、こうして

みんなと卒業式ができる．．

卒業証書が、受け取ることができる．．

嬉しい！ 私は、幸せ！

今は、クラスの生徒に卒業証書を

渡している最中だ！

1人2人と卒業証書を

受け取っていく人が、

増えていく

私が、卒業証書を受け取るのも、

もうすぐだ・

しばらく黙って待っていれば、

次は、なっちゃんの番だ！

先生は、間を開けて、
なっちゃんの名前を呼んだ・

『越水七槻』

返事をして、前後に
座っている人に

軽くお辞儀をしながら、

ゆっくりと歩く

七槻は、今ステージの上で、
卒業証書を受け取っている．．

七槻は、慎重に、

卒業証書を受け取った後、

歩いて自分の席に

戻った！

はつねは、緊張している．．

その時に．．．

『小森はつね』

と呼ばれ正直驚いた。

別に、驚くほどのことでもない

卒業証書を受け取るため名前を 呼ばれただけで、

なんか違う感じがした

でも、名前を呼ばれたので

私は、ステージの上によって、

卒業証書を受け取った！

卒業証書を受け取った瞬間

私の中で世界が変わった！

生きていて良かった．．

そんな風に思えた

それと 同時に さっきまで

降っていた雨が、やんだ。

むしろ、晴れてきた．．

あれから、次々とクラスの生徒も

卒業証書を受け取り、

卒業式は、幕を閉じた。

卒業式本番《後半》（後書き）

すいませんm（　　）m

後から、気づきましたが、

13話で、誤字がありました！

〈濡れを 塗れと

間違えてしまいました〉

ちなみに、

はつねのフルネームは、

今までは、考えていませんでした（　ー　ハ　＊　）／

卒業証書を受け取る時にフルネームで、

名前を呼ぶから考えました♪（＊　＾　・　＾　）ノ（☆

『小森はつね』っていう名前にしました！

小森っていう名字の由来は、とりあえず七槻の越水っていう名字と、
出席番号が、近くなるからです。

今回文章が、変になりました（・ω・）／

評価お願いしますm（　　）m

Thank you for everything (前書き)

タイトルが、長くてすみません

Thank you for everything ｝

ねえ、なっちゃん

私たちって離れていても

友達のままだよね・・・！！

卒業したって・・

友達だよね・・・！！

卒業式は、終わり

みんな学校の校門の前にいる
七槻は、いろんな友達と、

仲良くしながら、

別れを告げている。

なっちゃんは、相変わらず大人気だ・・

四方八方ふさがっていて、

入る隙間もないくらいである

「なっちゃん、

元気でねー!! 探偵がんばって。」

「名探偵になってねー!!」

なっちゃんの活躍をまた見るからね……!!」

などなどの会話が多くある。
はっねは、隅のほうで、

七槻の近くにいる

隣から、七槻を見ると、

なんかほっとする・

嫌なことも吹っ飛ぶ

ハンカチにのせたお嬢様から、もらったピアス

太陽のせいが一瞬光って見えた

朝は、雨で濡れていて、

光など、感じなかった・

今、こんなに美しい景色と、

光景を目の前で、

見れるなんて．．

なっちゃんは、友達と記念に写真を撮る

いつでも、輝いているなっちゃん

相変わらず元気だなあ．．．

友達1人1人にも優しく、

『ボクも探偵として、がんばるから

みんなも頑張れ！！！！』

って応援する．．．

その言葉を聞いたみんなは、

なっちゃんに感謝して、学校の校門から

去った．．．

これで、本当にみんなとは、会えないね…!!

でも、いつまでも寂しがっている場合じゃない

こうしている間に、

せれんお嬢様は、

薬に溺れて、

自殺未遂になっているかもしれない

まあ…私は、

お嬢様は、そんな人じゃない・・・

そう、信じたい

ああ、空は、

満天　そしてきれいな空

卒業式前の天候とは、

大違い・・・

でも、空の下の私は、

とても、寂しく照らされている

みんなが、学校にいたあの時と雰囲気が違う

みんなが、帰ってから、

心に少し穴が

あいた気分である

なぜか なっちゃんに言いたい事が、
伝えられない．．

どうしよう．．

また、誘拐された時のあの頃のように、何も言えない自分に

戻ってしまうの．．

そんなのイヤだ．．

もう時間だけが、経っていく．．．

いつの間にか、

私となっちゃん以外の生徒は、

校門を出て、

帰ってしまった．．

こんなに時間が、経ったのに

いつまでも、待ってくれるなっちゃん．．

私の気持ちだが、本当に

わかっている．．

でも、迷惑じゃないかな？

なっちゃんを待たせたら

いけないよね．．

「あ、あのねえ」

なっちゃんに渡したい物が、あるの．．

はい、これ．．」

はつねが、待っていた物は、

ハンカチにのっている

いまなお、光っているようなピラス．．．

その輝きに驚く七槻．．．

「えっ… ピアスって学校に持っていったら、

没収されて、

反省文を10枚書かされるよ…

今日、ピアスって持ってきていたの？

良くバレなかったね…」

「うん…、 まあね…!!!!」

今日は、卒業式だから、 チェックされなかったんじゃないの…」

「まあ、そんなことは、

もうどうでもいいなあ…

終わったことだし…

ってごめん ごめん…

このピアスの話だったよ

買ったの?」

「ううん…、

昔、私が幼い時にせれんお嬢様にもらったピアスなの

偶然、四国に旅行に行った時に

せれんお嬢様に会ったんだ．．

せれんお嬢様は、要らないから、

あげるって言った．．

このピアスを私に渡した後、

お嬢様は、私の前から去った．．

このピアスは、せれんお嬢様にとっては、

要らない物かもしれない

でも、私にとっては、

光り輝くこのピアスが、

一番の宝物なのよ．．」

「でも、宝物なら、

せっかくだし、

はつねが、持つべきだよ…！

そんな一番の宝物を受け取るなんて

はつねに悪いよ．．」

はつねは、笑った

「でもいいの．．

なっちゃんにこのピアスをあげるのなら．．

私はね、今まで助けてもらったこと

とても感謝しているよ．．

私も、なっちゃんに何か喜ぶようなことを、したい

喜ばせたい．．

そういう願いがあるの．．

なっちゃんは、ピアスがほしいかどうか知らないけど、

私の宝物だから

なっちゃんに渡したいんだ。」

「うん…！」

わかった。」

はつねが、わざわざ宝物を渡してくれるなんて、

嬉しいな。」

ボクが、はつねを助けたことを本当に感謝していたんだ

ありがとう……

後、憧れのお嬢様にもらったという大切な宝物「ピアス」を

ボクなんか渡してくれて

ありがとう……

そして、大切にするよ。」

はつねから、涙が、
ポロポロと

こぼれ落ちる・・・

涙のしずくが、地面に、次から次へ

落ちてゆく・・・

「はつね どうしたの？

なんかつらいことでも、あったの？」

「ううん・・・、

違うの・・・

私の宝物のことを

大切な物のように言ってくれたのが、

嬉しいの・・・

悲しい涙じゃない

うれし泣きをしていたの・・・」

涙が、止まらない

それほど、嬉しくって

しょうがない・・・

優しいなっちゃんは、

無言でハンカチを渡してくれる

私は、ハンカチで、涙をふいた

また何気ないところで、

助けてもらった．．

『ありがとう』

と小さくつぶやいた

時間が経つと、涙は、止まった．．

もうすっかりと、辺りが、暗くなりつつある

そんな暗くなるまでで、なっちゃんは、
私と待っていてくれた．．

本当になっちゃんには、

感謝で、いっぱい．．

私は、改まってなっちゃんに、しゃべりかけた．．

「ねえ……!!」

「ん 何？」

「私達って離れていても、

友達だよね……」

七槻は、笑って

「当たり前じゃないの……

これから、お互い困った時は、
助けあうんだよ……

それに、はつねのメイドになりたいという夢

応援しているから……」

次は、涙がでるのを
こらえた……

「ありがとう

絶対にメイドになるから……

後、内気な私に一番初めに
友達になってくれて

ありがとう……

ついこの前まで、他の人と

仲良くできなかった私が、

少し話せるようになったのも、

なっちゃんのおかげだよ．．

ほんの少しい思い出になったよ．．

本当にありがとう．．」

「また、

メールしよう．．

絶対にはつねとの思い出は、

忘れないよ．．

はつね今までありがとう．．」

もうすっかり、夜になっている．．

晴れ晴れとしたこの天気には、

夜になると小さな星が見える

2人には、流れ星があるように

見えた．．

それぞれの夢を叶えさせると

誓った．．

2人は、幸せな様子である

しばらく経ってから、

七槻とはつねは、

それぞれの家に帰っていった。

七槻は、はつねから、

もらったピアスを慎重に持って帰った。

2人とも

『今までありがとう．．

そして、今までのことを忘れない』

ってお互いに

思っている．．

後ほどのつらく悲しい事実が、

2人には、待ちうけていることなど知らないで・

Thank you for everything 〵 **(後書き)**

タイトルの意味は、〴〵今までありがとう．．〴〵

です(ーへ＊)／

これは、コナンのエンディングテーマの

『Thank for everything』

からですo(へへ)o

私は、この曲が、好きだから、

このようなタイトルにしました☆彡

評価もお願いしますm(〴〵)m

卒業後は・（前書き）

卒業後の七槻とはつねの話です。

卒業後は・

彼女たちは、学校を卒業した

今は、それぞれの道を歩んでいる。

七槻は、探偵として、周りに起きる事件を解いている。

はつねは、せれんお嬢様が、住んでいる

ラベンダー屋敷で、メイドとして、働いている。

どうやら、せれんお嬢様が、

はつねのことを気に入ったみたい・

あの幼い頃に、ピアスを

渡したことを覚えていてくれている・

昔会ったはつねの印象は、強かったようだ！

それで、お嬢様は、
はつねをメイドとして雇ったらしい・

今は、ラベンダー屋敷で、

働くといっても

ただの地味な雑用係

お嬢様のお世話係りなんてもってのほか．．

いつかは、せれんお嬢様のために、

働きたい。

たとえば、今は、無理だとしても．．

名探偵越水七槻として、

売り出し中になっている七槻

どうやら、今日も難事件に遭ったみたいだ．．

また、福岡県警の

あの事件に関わった
刑事さんとともに行動している．．

高校生の時より、推理力が上がっているみたい..



あ、メールの着信音だ！

そういや、マナーモードにしていなかった..

でなきゃいけない！

誰だろ！？

宛名.. 小森はつね

件名.. なっちゃんへ

本文..

なっちゃん久しぶり☆

ゴメン..！

なっちゃん忙しいよね..

でも、私は、なっちゃんの様子が知りたい！

私は、せれんお嬢様のおかげで、

メイドとして働くことができたわ..！

がんばって名探偵になってね..

今は、部屋の掃除中

ちなみにせれんお嬢様は、

いつもラベンダーの花に包まれた部屋で
1人優雅にしているよ

せれんお嬢様は、1人になるのが、好きみたい．．

だから、葉に溺れているかもしれない．．．

久しぶりにはつねからのメールが、

きた

七槻は、とても嬉しそうだった．．

「なっちゃん誰からのメールだった？」

「はつねからだよ．．」

「そうか．．はつねちゃんは、元気か？」

「ええ．． 学生時代、彼女は、

とても元気で、表情も笑顔だったよ．．

今の様子は見てないから、
わからないけど、多分元気になっているよ．．

ただ気になることもあるみたいだけど．．」

「えっ．． また何かあるのか？」

「はい．．」

今彼女が、四国のラベンダー屋敷で、

メイドとして働いています。

そのラベンダー屋敷に住んでいる

小池せれんお嬢様が、

最近 薬に溺れているという噂があるらしいです。

それで、今その可能性があるから、

彼女はちよつと悩んでいます．．

はつねは、本当に、

せれんお嬢様に憧れているから．．．」

今、この場所は殺風景である

「そうか．．」

はつねちゃん、憧れの人に疑惑があるのに、

耐えてメイドとして働いているんだな．．

しかも、まだせれんお嬢様っていう人の
状況もわからないだろうに．．

お嬢様の様子が知りたくてしょうがない．．．

でも、ガマンしているだろうな．．」

はつねは、とてもつらいだろう．．

今、はつねはどんな気持ちなんだろうか

親友として知りたくしょうがない

メールじゃなく、

声を聞いて確かめたい

でも、今は事件の捜査中．．．

電話していいはずがない．．．

どうしようか迷ってしまう．．

「なっちゃん、

はつねちゃんに電話してやれよ．．．！

きつと電話してほしいと思っているだろう．．」

「え．．あ、はい!!」

七槻は正直驚いた。

刑事さんも自分と同じ考えだから．．．

まるで、今の七槻の

気持ちを見透かしていたかのように．．

七槻は、はつねに電話をする。

はつねは、今部屋の掃除を

している。

1人でちょっと寂しいような気分．．．

せれんお嬢様のために

働けたらなあ．．

そう思う。

プルルル．．

携帯電話の音だ！

どうやら 電話のほうの音だ！

私は、電話に出た。

「あ、はい… もしもし…」

『はつね・・・久しぶりだね…』

(えっ…、)

どっかで聞いたことのある声が、

聞こえてきた…

とても優しい声がほんの数秒

確かに聞こえた。

電話からの声だけど

とてもあたたかいような感じだった…

気が楽になってついつい床に座り込んでしまう。

開いていた窓から、

春の風が吹いてくる。

私は、その声の主を頼ってしまった

「ねえ・・・

知りたくても 知ることができない場合はどうすればいいの？

私、せれんお嬢様が、1人で何をやっているか 気になってしょうがないの・・・

どうしても心配なの・・・

どうにも、焦ってしまう・・・

せれんお嬢様が、亡くなるなんて、

嫌だ・・・

そんなことを他のメイドの人達に

話しても、 誰も聞いてくれない・・・

こんな未熟な私の言うことなど、

誰も信用してくれない・・・

どうしよう．．

私は、せれんお嬢様に関して様子を見ているだけ

何もしてやれない．．．

私は、どうすればいいの？」

七槻は、一呼吸して、

『私は、はつねを信用しているよ．．

たとえば、他の人達が、はつねを信用していなくても．．．

今は、はつねを助けることができなくて、ゴメン！

私も難事件を持っているんだ．．

それが、解けたら絶対にはつねが働いている

ラベンダー屋敷にのところに

行くよ．．．』

そう言ってもらえると、

自分には優しいなっちゃんが、いてくれて

本当に幸せだと思う。

「なっちゃん ありがとう・・・」

ちょっと安心したわ：

私のことを信用してくれたもんね：

久しぶりに嬉しかったよ．．

後、なっちゃんって自分のことを言う時、

“ボク”から“私”に変わったね・・・」

「まあね： もう学生じゃないから、
ボクっていうのは、
止めたんだ・・・」

これからは、私って言おうと思っているんだ．．」

「ふーん・・・ でも、なっちゃんはどっちでも、

いいと思うよ：

それは、さておいて
私も仕事がんばるよ！

なっちゃんもがんばって、

難事件を解いてね…

電話ありがとう・・・」

お互いに久しぶりに話をしたが、

楽しそうだった・・・

きっとこれが最後になるだろう・・・

卒業後は・（後書き）

久しぶりの2人の電話です☆
相変わらずはつねは、つらそうです。

次回は、どうなるのか？

評価お願いしますm（　　）m

はつねとせれんお嬢様《前半》（前書き）

はつねとせれんお嬢様の話です．．

はつねとせれんお嬢様《前半》

せれんお嬢様．．

あなたは、今何をしているのですか？
私は、あなたの様子が知りたいです。

憧れのあなたが消えてしまおうと思うと

つらいです．．

一度でもいい！

お嬢様の様子が知りたいです．．

★★★★★★★★

「せれんは、どこか知っているか？」

あ、旦那様だ．．

今日もお嬢様のことが、

気になっているのですね…。

私には、関係のない話だけど…

私は、自分の仕事でもやるか!!

はっねは、部屋の掃除係!

偶然にも、となりの部屋に旦那様が、話していたので、聞き耳を立てていた。

部屋の掃除って言っても、

あまり使わない部屋の掃除している。

あまりその部屋を

使わなくせに、毎日大規模な掃除を何時間もやらされる

全く金持ちって、使用人たちをつかいたいだけなんじゃあ…

いいなあ… せれんお嬢様のお供になっている人…

一番幸せだろうね…

私には、

縁のない話だから、どうしようもないけどね…

「せれんお嬢様は、いつもと同じように部屋に引きこもっています。

ドアをノックしても

返事が、ありません。」

「そうか．．．ってお前は、せれんの様子を見に行け」

「は、はい．．．旦那様．．．」

今、旦那様と話していたのは、執事の甲谷廉三さん．．．

彼は、せれんお嬢様のお供をしている

甲谷さんは、せれんお嬢様の部屋へ向かった。

私は、ぼーっとして二人の会話を聞いていた。

「はつね君、ちょっと来なさい！」

旦那様の声だ．．．

あ、やばい・・・

ぼーっとしていたの旦那様に見られた？

仕事真面目にやらないとクビになってしまう・・・

多分、

『お前は、クビだ・・・』とか言われる。

その覚悟で、私は

旦那様の声が聞こえる方に行った。

旦那様が、居るとなりの部屋に行った。

私は、ドアをノックした・・・

「すみません・・・

旦那様 私です・・・」

「はつね君か・・・

入りましたええ！」

私は、ドアを開けた。

「失礼します！」

旦那様は、下を向いている。

「君に話したいことがある。」

真剣に話している口調だった。

やっぱり、怒られるんだ。

私は、微妙に汗をかいた。

「な、何でしょう！」

旦那様！」

「実はだなあ、君にせれんのお供を
世話役をやってほしいんだ！」

（えっ・・・）

私は、すごい表情になっている

ものすごく驚いた！

ーせれんお嬢様の部屋ー

「お嬢様、入ってよろしいですか？」

甲谷さんは、お椀の上に、お茶をのせている。

「甲谷さんですね…
入っていいですよ。」

「はい…失礼します！」

ドアを閉めた。

「では、お嬢様…
お茶を飲んでください。」

「ありがとう。」

お嬢様は、無表情である…

静かにラベンダーの花の前で

お茶を飲んでいる。

お嬢様の部屋は、ラベンダーが、辺り一面にあって

美しい．．

しかし、あとは、何もないような感じで

殺風景のようだ．．

たくさんのお菓子がかくしてある．．

甲谷さんは、お菓子のある方に目をやった。

「甲谷さん、どうかしましたか？」

「いえ．．何でもありません！」

少し慌てている甲谷さんの表情．．

お嬢様は、クスツと笑った。

あの無表情なお嬢様から、

少し笑顔が、出た。

「わかっていますよ．．

どーせお菓子のことでしょ？」

「さすがはお嬢様．．

よくお分かりになりましたね……」

「当たり前でしょ．．

私は、今まで甲谷さんにいろいろと世話をしてもらったんですよ．．

もちろん甲谷さんなら、

自分の悩み事だって、

何でも言えますよ」

甲谷さんは、嬉しそうだった．．

「それほどまで、

私どものことを信用していたのですね……

お嬢様に嬉しいお言葉をもらい

光栄です．．

わかりました。 私もできる限りお嬢様に尽くしたいです．．」

お嬢様は、涙目になっていた。

ラベンダーの花も

寂しそうな感じだ．．

外の世界は、晴れている。

しかし、窓ガラスはともくもって見える。

「甲谷さんは、葉に興味はありませんか？」

「いえ．．すいません。

私は、そんなに薬が好きじゃありません！

せれんお嬢様が、薬を好んでいるのを知っているのに、

無礼なことを言ってしまった。」

「こちらこそすいません！

薬をわざわざ好むなんてありえませんか．．．

私には、快樂を感じれる。

自由になった気分だ．．

苦しさが、消えていく．．

そんな魔法みたいな代物は、薬以外にない

私には、自由がほしい．．．

自由さえあれば、

今の生活にしばらくたりしない。」

確かにお嬢様は、お金持ちだけど、昔から、
わがままはできなかった

いや… 許されなかった…

ピアスだって、つけてみたかった…

しかし、親はそんな物をつけることなど許さなかった。

せれんお嬢様は、勝手にいろんな人から、おしとやかにしていて

そしてラベンダーの花だけを愛している
上品なお嬢様だと思われている。

でも、お嬢様自身は、
それを求めている。

上品って思われなくてもいいと

思っている。

おしとやかにしたいわけじゃない…

まあ、ラベンダーの花は、

本当に愛しているけど…

私は、覚えていますよ…
お嬢様、

あなたがラベンダーの花が好きになったきっかけを．．

最近、薬の話が発展してきましたね…

そのうち薬で死ぬ可能性があります。

このまま薬で死なないで下さい．．

あなたの生きた状態で、

ラベンダーに包まれながら、

皆さんと元気にお話している姿が見たいから．．

私なんかは、いつでもお嬢様の相談相手になれて
光栄です．．

はつねと旦那様は、
まだいろいろと話している。

「後、せれん自身が、
君に世話になることを望んだのだ。」

びっくりした。

私は、憧れのせれんお嬢様に

信頼されたから。

でも、疑問だ。

私のような未熟な人より、
甲谷さんの方がいいのに。

とりあえず私は、なっちゃんにメールした。

「私は、せれんお嬢様のためのお供ができて良かった！」
この内容をメールした。

なっちゃんのところに届いているかな？

はつねとせれんお嬢様《中編》（前書き）

せれんお嬢様が、はつねを選んだ理由．．それは．．

はつねとせれんお嬢様《中編》

はつねは、気になっている．．

せれんお嬢様が、自分を選んだわけを知りたくてしょうがない．．

「旦那様、なぜせれんお嬢様は、

私みたいな未熟な者をお供に．．」

「何だ！不満か？

なら、甲谷さんのままだ．．」

「いえ：不満なんてありません！

むしろ嬉しいです。ただ、ちょっと気になっただけです！」

「フツ　まあいい！

話すとするか．．」

13日前1

私は、最近怪しいせれんの様子を見に行った。

「せれん，部屋に入るぞ…」

ドアをノックした。

せれんは、無反応だった…

ドアを何回たたいても、
一切反応しなかった…

ずっと引きこもっていた。

私が、しつこいのに対して、

何も言うこともなかった…

私は、何時間も部屋の前で、
ドアをたたいていた。

『せれん，　せれん』って呼んだ。

でも，反応は全くない…

私に何か怒っているのだろうか！！

確かに私は、甘えは許さなかった！

でも，それも全てせれんのためだ…

そう思って今までせれんを育てた。

その気持ちは、せれんには、届かなかった！

悲しくなった．．

私は、どうすればいいのか

わからなかった！

私の様子が、気になっていた他のメイドが、

せれんの部屋の合い鍵を

取ってくれた．．

「旦那様、せれんお嬢様の部屋の合い鍵でございます！
これで、お嬢様の部屋にはいれます！」

メイドは、私に合い鍵を差し出した。

「ああ．． ありがとう！」

低い声で、しゃべっていた．．

そのまま私は、せれんの部屋の

鍵を開けた。

入った瞬間、せれんが、
真っ先に見えた。

せれんに、何を怒っているのか

聞き出そうとした。

しかし、せれんは、
すっかり寝てしまった。

起こしたら怒られる
ような気がした。

私は、クスッと笑ってしまった。

ずっと、引きこもっていてしばらくしたら疲れて寝てしまうなんて、

かわいらしいところもあるじゃないか。

最近様子が変だが、
ラベンダーの花の香りが漂っている中で、

寝ているせれんは、

穏やかで、とても安心する。

心地よくせれんは寝ている．

ラベンダーの香りが、とても良い感じだ．

「んん．．．眠いなあ．．．

私何をしていたのかしら．．．」

せれんが、起きた。

ちよっと眠たそうに目をこすっていた。

（わたくし疲れているのかしら．．．）

辺りを見渡していた。

すると、せれんは、私の方を見た。

「お、お父様．．．なぜわたくしの部屋にいるのですか？

勝手に入らないで下さい！」

「いいでは、ないか．．．」

せれんは、ムツとした．．

「ご用件は、何でしょうか．．．」

「実は、せれんが、最近様子が、変だから見に来たんだ。」

「あらそう！」

でも、わたくしは、平気だから」

「そうか．．なら安心した！」

私は、部屋から、出ようとした．．

しかし、せれんに引き止められた．．

「待って下さい！お父様．．」

必死な表情をしているせれん

何か私にいたげな様子だ．．

「何だ！せれん．．．」

「わたくし、はつねさんについてもらった方がいいです！」

「じゃあ 甲谷さんでは、不満か？」

「いえ：別に不満じゃありません！」

むしろ、甲谷さんには、いろいろとお話がしやすいです！

しかし、わたくしには、彼女との忘れられない過去が、あるのです！

私のわがままですけど、

はつねさんについてもらってほしいです。」

私は、一旦息を止めた。

はつね君は、せれんに信頼されているのだと感じた。

昔の会った時のことを覚えているぐらいだから．．

彼女は、せれんにとって必要な存在かもしれない．．

そう思って私は、はつね君に、

せれんを任せることにした．．

「せれんは、はつね君と過去に何があったんだ？」

「別に．．ただ会ったことがあるだけですよ．．

私が、幼い時に大切な物を彼女には、

渡したから．．

まあ、はつねさんは、そんなことを忘れていると思いますけど．．」

「何なんだ？大切な物っていうのは．．」

「私が一度つけてみたいと思って買ったピアスです！

でも、わたくしはピアスをつけるのに

ふさわしくない．．

わたくしは、穏やかなお嬢様としてとおっているから．．

ピアスなんて、似合わない．．．

だから私は、あきらめて

通りすがりのはつねさんにピアスを渡したのです！

はつねさんは、

私の大切な物を渡した相手だから、

忘れられない．．

たとえば、はつねさんが、

ピアスのことを忘れているとしても、

彼女には、一緒にお話してほしい！

いいでしょうか．．」 「そうか．．」

それだけ言い残して、
私は、部屋から出た。

とにかくせれんには、はつね君が、

傍にいたほうが、いい！

それが、せれんの望みなんだから、

私は、はつね君をせれんの世話係にする！

そう決めたのだ．．

はつねは、感動した！

せれんお嬢様も、ピアスのことを覚えていたなんて．．

私は、てっきり忘れていたと思った。

あまりの嬉しさに、
泣きそうになる．．

なぜならば、自分の
憧れの人に信頼まで、

されているから．．

また、なっちゃんにメールしようかな！

嬉しすぎて言葉にできないけど．．

その頃七槻は、

携帯電話にメールが、来ているか

確認した。

（はつね　憧れのせれんお嬢様のために
働けて良かったね．．

私は、まだ難事件が解けていないけど、
必ず解いてみせるよ．．．

はつねも頑張れ！！）

メールの内容を見て
心から、はつねを応援した．．

はつねとせれんお嬢様《中編》（後書き）

これは、中編です。

次は、はつねとせれんお嬢様の様子を表しているところです！
評価お願いしますm（　　）m

はつねとせれんお嬢様《後半》（前書き）

とても、下手な文章で
わかりにくくてすみません

はつねとせれんお嬢様《後半》

私は、旦那様の命令で、

明日からせれんお嬢様のお供をすることになった．．

明日が楽しみではない。

メールが、きた。

私は、メールの内容を見て見た．．

なっちゃんからだった！

「はつね良かったね．．

今までせれんお嬢様に仕えることを望んでいたんでしょ．．．

はつねは、幸せ？」

はつねには、嬉しいことだらけだ．．

幸せ気分だった！

私は、なっちゃんに

メールを送信した。

「うん： 私は、とても幸せだよ・・・」

嬉しすぎてしょうがない。

憧れのせれんお嬢様は、

私なんかのことを信頼していたから・・・

それと探偵としての仕事は、どう？

やっぱり、依頼人とかも多い？」

なっちゃんからすぐに、

メールがきた。

「依頼人？ まあまあ来るけど・・・」

今は、難事件で忙しいんだ！」

はっねは、

『また難事件か』といいながら、クスって笑った。

――事件現場――

事件現場には、警察と七槻が、いるみたいだ・

この殺人事件の謎は、

七槻でもまだ解けないぐらいだ！

みんなが、考え込む中、七槻は、

1つ怪しいような行動をしている。

はつねにメールを送信しているみたいだ・

「なっちゃん、何やっているんだ！」

私は、急いだ。

「すみません・・・！」

今行きます。」

辺りはすっかりと夜になっている。

七槻は、夜になっても

捜査の手伝いをやっている

夜は、少し寒気がする．．

七槻は、はつねの事を考えながら、

何時間も捜査を続ける。

夜ずっと捜査をしていても、
やはり事件の真相が
わからない。

そのまま朝になった。

朝の太陽はとてもまぶしい。

なっちゃんのいる福岡も今日は、晴れ晴れとしている。

起きたばかりのはつねは、
上におもいきり

背伸びをした。

「朝は、気持ちいいわね！
相変わらず鳥が、鳴いているわね．．」

そして、私の部屋までラベンダーの香りが、

漂ってくる・・・

せれんお嬢様の好きなラベンダーの香りだ．

お嬢様は、ラベンダーの香りが、好きかな？

私はとてもラベンダーの香りが好きだけど．

今日から、お嬢様を守る係になった。

私もなっちゃんと同じように、

せれんお嬢様の命を

守り通してみせる。

まあ、薬に溺れていなければ、

別に大丈夫だと思うけど．

はつねは、せれんお嬢様と甲谷さんの会話を聞いていない・・・

その時にお嬢様が薬のことを

話していた・・・

お嬢様が、

いろんな薬に興味を持っている状態とは知らず

はつねは、

そんなせれんお嬢様の

ために働くことを、嬉しがっている．．

（ハア： やっと部屋の掃除から解放されたわ．．．）

本音としては、

掃除が、嫌だったっていうのもあるけど．．

嬉しいには、変わりはない．．

この日をどれだけ待ち望んでいたか．．

指で、何日たったら

せれんお嬢様のために働くことが、

できるのか数えていた。

おそらく、永遠に指を折り曲げて

数えていると思っていた。

でも、もう数は止まった．．

せれんお嬢様のラベンダー屋敷で働くようになってから、

50日間目で、数えることが止まった．．

ついに望み通りになった。

私は、ルンルン気分で、

食堂へ向かう．．．

食堂には、使用人の人達が、
食事の準備を

している．．

旦那様が、食堂で、食事がくるのを待っている．．．

私は、いきなり旦那様に
手招きをされて、

旦那様のいる方向へ行った。

小声で、

『はつね君、せれんを頼むぞ…
君を頼りにしているからな．．．！』
って言った。

それから、私も食事の準備を手伝った．．

私は、お嬢様の食事を
作るのを手伝った．．

「じゃあ、私が、せれんお嬢様の食事を
部屋に持って行きます！」

そう言って、みんなの前から去った。

お嬢様の部屋の前だ．．

いくら信頼されているといえども、

なんか緊張してしまう．．

どうしよう．．

内気な私は、ちょっと考え込んでしまった。

でも、お嬢様が、
食事を楽しみにしている。

だから、勇気を出して、
部屋のドアをノックした。

「お嬢様、部屋に入っていていいですか！」

「はつねさん　ですね…」

どうぞ 入ってください！」

私は、緊張している状態で、

お嬢様の部屋におそろおそろ入った。

お嬢様は、ベッドに座っていた。

「お嬢様、今日の朝食です．．」

「あ、そのテーブルに置いといってください！」

お嬢様は、とても小さな声で、しゃべっていた。

無表情である．．．

私は、お嬢様に言われたとおり、
近くのテーブルに朝食を置いた。

「ありがとうございます．．．」

せれんお嬢様は、また小さな声で

つぶやく．．

なんか、せれんお嬢様は、いつもと違って、

死んでいるような目で

私を見ってくる．．

細めたような目だった。

まるで、別人みたいな顔をしていた。

私は、せれんお嬢様に何か異変が、あるように思えた。

「はつねさんは、葉が、好きですか!？」

(えっ…)

私は、とても驚いた。

いきなり何をいい出すかと思えば、

葉が、好きかどうかを聞いてきた。

「普通ですけど・・・」

さりげなく、質問に答えた。

私は、やっぱり葉に溺れたというウワサを信じてしまう。

「では、ラベンダーの花は好きですか!？」

「ええ… 好きですよ・・・」

「そうですか!!」

私もまだラベンダーの花に包まれながら、
暮らしたかったのに・・・」

何もかもがなくなり、追いつめられた感じである。

せれんお嬢様・・・

やっぱり薬に溺れているんだ・・・

信じたくないけど・・・

「私 最近変なんです・・・
薬がとてもほしくなって・・・
毎日、いろんな薬をのんでいます！
薬をのめばのむほど、

さらに薬がほしくなる・・・
どうしよう・・・

わたくし、
このまま死にそう・・・」

追いつめられたお嬢様は、泣いた・・・

黙って、

うつむきながら・・・

「お嬢様は、なぜ薬を、
たくさんのんだのですか!？」

「快樂を与える魔法のような代物だから．．
いつも、ストレスがたまっているんです．．

お嬢様らしくしているのがイライラします．．

私の心は、完全に疲れきっている。

薬の快樂がないと、自分をコントロールできない．．」

せれんお嬢様は、甲谷さんの他に

はつねにも、素を見せた．．

はつねとせれんお嬢様《後半》（後書き）

すいません！

本当にわかりにくくてすいません。〇（――＊）〇

次は、せれんお嬢様の心情についてだと思っています

評価お願いします。m（――）m

つらいせれんお嬢様(前書き)

めちやくちやな話ですいません！

つらいせれんお嬢様

はつねとせれんお嬢様は、

誰も邪魔にならないように、
小声でしゃべっている。

せれんお嬢様の部屋は、密室のようだった。

私は、迷った．．

快楽のために、薬を好んで、死にそうなお嬢様をどう救うのか！！

どうすれば 生かすことが、できるのだろうか．．

今日の天気もまた晴れ晴れとしている．．

外は、光り輝いている．．

太陽が、生きている庭の花や植物を

照らしてゆく．．．

とても、暖かい天候だ．．

でも、それも外だけが、光り輝いている．．

この密室みたいなこの部屋は、

なんか空気が、重い．．．

なっちゃんは、暖かい太陽の下で、

難事件の調査しているだろう．．

「ヘクシュン．．．．．」

こちらは、福岡の事件現場！

今日もなっちゃんと刑事さんが、

一緒に捜査をしている

ここは、とても太陽が当たる。

「ん、なっちゃん風邪気味か！？」

「いえ：別に、風邪はひいていません．．．」

「なんかウワサしているんじゃないか。」

ほら、なっちゃんは、

福岡では、名の知れた
探偵だろ。」

七槻は、笑った。

「まさか、それは、ないと思うけど。」

「はつねちゃん仕事がんばっているかな？」

「うん：がんばっていると思うよ・・・」

はつねは、仕事に関して責任感があるから。」

七槻は、空を見上げる。

「あとね：！せれんお嬢様をしっかりと見守るってちゃんと言ったよ・・・」

「そうか。」

刑事さんは、ボソッと一言つぶやいた・・・

雑談が終わってから、
なっちゃんと刑事さんは、
捜査を始めただろう・・・

ーお嬢様の部屋ー

せれんお嬢様の部屋では、
まだ暗い空気が、漂っている・・

明るく咲いているラベンダーの花だけが、とても目立っている・・

「葉に溺れて死にそう・・・

私は、どうすればいいの？」

お嬢様は、頭を抱える。

無表情な顔では、なく涙目になっている・・

「わたくし、もう苦しいわ・・・

このまま命を絶ちたい・・・

そうすれば私は、苦しみから、解放されるわ・・・

薬を飲みすぎたわね・・・」

‘命を絶ちたい’

この言葉が、せれんお嬢様から発したから、

私は、正直焦った。

せっかくせれんお嬢様と長い時間お話できるのに・・・

憧れの人の死など見たくもない・・・

受け入れたくない・・・

はつねは、大量の涙を流した。

「はつねさん・・・？」

「せれんお嬢様、生きていてください

悲しいです・・・

せれんお嬢様は、なくなったら私は、とても悲しいです・・・

お願いします。

どうか、死ぬのは、
止めてください！

私、せれんお嬢様ともっと楽しいお話をしたいのに・・・

お嬢様が、死ぬなんて、いやです．．

もっとお嬢様に役立ちたいのに・・・

」

はつねは、悲しそうな表情をして、

うつぶせになって泣いている．．

お嬢様は、

はつねの様子をただずっと見ているだけ．．

せれんお嬢様は、歯を食いしばった。

「は、はつねさん・・・

すみません！

ちょっと苦しいわ・・・

30分ほど部屋で休みたいです．．

はつねさん30分だけ

1人にさせてください！」

お嬢様は、苦しそうな表情だった。

本当は、私もせれんお嬢様を見張りたい．．

でも、私も仕事があるので、

お嬢様の部屋から出た。

せれんお嬢様は、ベッドから立ち上がった。

ベッドの下にしまつてある縄を

両手で持つ

死ぬつもりだ．．

ベッドの下に縄を隠していたことから、

前から、死ぬつもりだったみたい．．

縄をおもいつきり握りしめる．．

はつねさん、．．．

ごめんなさい！

あなたを悲しませるなんて、
私は、最低なお嬢様です．．

私なんかのことを本気で心配してくれるなんて、

嬉しいわ・・・

でも、わたくしは、生きていると
苦しくなる・・・

薬に溺れて、毎日自殺未遂ばかり・・・

なんとか命だけは、助かっている・・・

でも、その繰り返しは、

つらい・・・

本当は、全てわたくしが、悪い・・・

わたくしが、たくさんの薬を味わっていなければ

自殺未遂もなかったのに・・・

自殺未遂なんか繰り返しているのなら

死んだほうがマシだ・・・

空は、明るいなあ・・・

わたくしなんかとは、正反対・・・

ラベンダーの香りが、
いやでも、漂う。

ラベンダーの花の思い出を思い出す。

――回想――

私が幼い頃、小学１年生の時・・・

庭全体を、走り回っている．．

「甲谷さん、わたくしから、頼みが、ありますの．．．」

「何ですか！？お嬢様．．」

「わたくし、自分の部屋に花が、置いてほしいですわ．．．」

私は、花を見るといろいろと、やすらぐ。

数え切れないほどの花についつい興奮する．．

甲谷さんも、フツと笑った。

「では、私がお嬢様のために花を買ってきます。」
甲谷さんは、花を買いに行った。

私は、待ちどおしくてしょうがなかった。

甲谷さんは、30分ほどで、
屋敷に戻った。

「お嬢様．．買ってきましたよ．．．
これは、ラベンダーっていう花です！」

ラベンダーの花を私の前にさし出した。

それは、とてもいい香りだった。

「ラベンダー．．

よい香りですね．．
気に入りました。

ラベンダーの花絶対に大切にする．．」

私は、幼い頃言ったことを守り、
ずっとラベンダーを
大事に育ててきた。

――回想終了――

だめだ．．

過去を思い出すとつらくなる．．

ラベンダーの花を見るのもこれで最後．．

私は、しばらくラベンダーの花の香りや
美しさに魅入ってしまった。

30分という時間は、
私にとってとても長い夢だった。

私は、黙ってしっかりと持っている縄で自分の首をしめた．．

そして、首を吊って自殺した．．

っらいせれんお嬢様（後書き）

本当にわけのわからない話ですいません！

評価が1ポイント減ってしまいました。評価お願いしますm（

）
m

つらいそれぞれのオモイ〜大切な人を失った悲しみ（前書き）

せれんお嬢様の自殺後の話です。

つらいそれぞれのオモイ／＼大切な人を失った悲しみ

あれから、30分経った！

私は、せれんお嬢様を呼んだ。

でも、反応は全くない．．

何回も何回も呼んでも

やはり無反応である。

なんか変だなあとはい、

私は、お嬢様の部屋の鍵を急いでとりに行った。

鍵を開けた．．

そして、お嬢様の様子を見ようと

部屋の中に入った。

部屋に入ったら、

せれんお嬢様の哀れな姿が、

異様なほど焼きついた。

お嬢様は、私の目の前で、亡くなっていた．．

周りには、散らばったたくさんの薬と、
しおれているラベンダーの花が、

一面に咲いている．．

ラベンダーの花の命も、
お嬢様と同じように
失ったように見えた！

首を吊ったお嬢様を見て、
声がでなかった。

こんな哀れな姿を見てしまい

何も考える余裕もない．．

泣く気にもなれない．．．

自分を見失いそうになる。

亡くなった

せれんお嬢様の目の前で、ずっと立ちっぱなしで、ぼーっとしている
自分もわけわからない

でも、自然と涙が、
こぼれ落ちる。

悲しいからだろうか．．

何もかもなくなったような私でも、

せれんお嬢様のことは、それほど

憧れていた．．

失ってほしくない．．

無意識のうちに、涙のしずくは、
こぼれ落ちていた．．

泣いても、泣いても
どんどんこぼれ落ちる涙．．

床が、一部分濡れていた．．

今は、もう夕食の時間だ．．．

いつまで経っても食堂にこない私を
他のメイドが、心配して

探し回っている．．

みんなで、手分けして
探していたら、

私は見つかった．．

「はつねさん、どうしたのですか？」

ある使用人が、泣いている私を心配した。

「せ、せれんお嬢様が、亡くなってしまいました・・・
私のせいで、お嬢様は、自殺した・・・
どうしたらいいのですか？

私は、もう誰かと話す気にもなれない・・・

小学生の時から、ずっとラベンダーの花を愛するお嬢様に
憧れていたのに・・・

高校を卒業したらせれんお嬢様が、住んでいる
ラベンダー屋敷で、
働きたかった・・・

私は、お嬢様に相手にも
されていない日々の
繰り返しだった・・・
でも、それでも

‘いつかは、せれんお嬢様のお供’が、
できるって思いながら、
ガマンし続けていたのに・・・

そして、やっと今日せれんお嬢様と話すが、
できたのに・・・

もう亡くなってしまって
結局、せれんお嬢様を助けることも、

えっ…はつね…どうしたの!？」

はつねは、とても慌て事情を話した。

「なっちゃん、今すぐここに来て…」

お嬢様が、せれんお嬢様が、薬に溺れたかどうか分からないけど

首を吊って自殺していたわ…

なっちゃんなら、せれんお嬢様が自殺した動機を

分かると思うから…

場所は、四国の〇〇県にあるラベンダー屋敷だよ…

目印は、たくさんのラベンダーの花よ…」

私は、今までになかった険しい顔で、

早く電話をしている…

なっちゃんは、焦っている…

「刑事さんは、残って捜査してください…

私は、1人で、行くところがあるから…」

「オイ…なっちゃん

今は、夜だぞ…」

私は、引き止める刑事さんを見捨て、

せれんお嬢様のラベンダー屋敷へ向かった。

みんなが、騒いでいるので、

旦那様が、せれんお嬢様の部屋へ向かった。

「何の騒ぎだ！」

みんなせれんお嬢様の自殺についての

事情を話した．．

それを聞いた旦那様は、

悲しいような怒ったような表情だった．．

「はっね君、

こっちに着なさい．．」

私は、旦那様の部屋へ行った。

思った通り説教である。

「どういうつもりなんだね…」

当たり前だが、

旦那様は真剣に怒っている

私は、ものすごく硬直している。

「すみません！」

私は、本当に申し訳ないと思っています・・・」

その言葉にさらに、

イラついている旦那様・・・

ペシッ・・・

そして、ついに

旦那様は、はつねを叩いた

「何だと、

何が、

『すみません』だ・・・

お前は、謝ればそれでいいかもしれねーけどな・・・

私は、1人娘のせれんを失って悲しいっていうのに・・・

お前ならせれんを任せられる！

そう思っていたのに・・・

こうも簡単に自殺させやがって・・・

お前にせれんを任せた私が、

バカだったよ・・・

仕事もまともにできないようなヤツに

うちで、働いてもらう必要はない！

君は、もうクビだ・・・

この屋敷に居座る権利などない・・・

今すぐ、荷物をまとめて、

屋敷から出る・・・」

旦那様は、怒ってもいるが、

泣いている・・・

私には、どれだけ旦那様が、

つらく悲しい思いんしているか

よくわかった。

でも私も、悲しい・・・

なぜならば、旦那様の信頼を失ってしまったから・・・

もう二度と旦那様と会うことも

ないだろう・・・

二度と信頼なんか

されないだろう・・・

私は、すぐにこの屋敷を出ていくから・・・

ごめんなさい、

なっちゃん・・・

私は、自分の夢も失って、

何もかも捨ててしまったよ・・・

こんな時、なっちゃんが、

私を救ったら

それは、奇跡でしょ・・・

私は、全ての荷物をまとめた・・・

そして、夜の冷たい風を感じながら、

誰にも気づかれずに

ラベンダー屋敷から

姿を消した・・・

つらいそれぞれのオモイ〜大切な人を失った悲しみ（後書き）

更新遅れてすいません！

携帯の様子が、ちよつと変だったので、

投稿できませんでした・・・

私は、テスト前です。

ちよつと焦り気味なので、

文章は前より下手です。

すいません！

評価お願いしますm（　　）m

ラベンダー屋敷から消えるはつね（前書き）

文章がめっちゃめっちゃ& a m p、短いです

ラベンダー屋敷から消えるはつね

私は、見捨てられた……

旦那様は、私なんて必要としてない……

せれんお嬢様を守れなかった

役立たずであるから……

孤独の中、夜道を歩く……

とても寂しい……

旦那様も、同じくせれんお嬢様が

逝ってしまったことが、

悲しいだろう……

周りは、殺風景である。

誰もいないような暗闇の空間……

そんな暗闇の中に

入ったような気がする。

はつねは、

また泣いている。

声を上げて泣きたい・・・

そんな気分である。

一応、こらえて

うつむいて泣いている。

（はつね、せれんお嬢様が死んだことで、
ショックを受けているのだろうなあ！！）

七槻は、はつねの心配をしながら、

走ってラベンダーが目印の

屋敷へ向かった。

足の痛みは、ものすごくある・・・

でも、今ごろはつねが、ラベンダー屋敷に

私が、来ることを待っている。

たとえば、どれだけ足が痛くても

七槻は、はつねの目の前を通り過ぎた・・・

はつねは、七槻の前でも涙を流している

その時に、七槻は、はつねの様子が変わることに気づいた。

「はつね、どうしたの？」

「なっちゃん、

実は私屋敷で働けないんだ。

せれんお嬢様を救うことができなかったから・・・

「はつね、それじゃクビになってしまったの？」

「ええ、私は旦那様に見捨てられたわ・・・

私には居場所なんてどこにもない・・・

暗い夜道の中でさまようしかないのはよ・・・」

「旦那様に、

クビを取り消してもらったほうが、いいよ・・・

ごめん！

また旦那様と話しあうのは

つらいもんね…！

無神経すぎるよね……」

「ううん、考えておくわ……」

私には、あの屋敷での
使命は果たしていないから……」

（はっね……）

大切な人を失い

そして、信頼されていた人から

裏切られて 本当に

かわいそうだ……）

私には、どうしようもない……

ただ夜の風に、

当たって

悲しさを味わっている。

夜明けが、近づいてくる。

まだ、モヤモヤする。

明るくなって

朝日が、美しくのぼっていても、

私が、せれんお嬢様の自殺を

止められなかった罪は、

残ったまま・・・

庭に咲いている花は、

とても悲しそう。

しおれて見える。

前までの美しさを
失ってしまった

せれんお嬢様のような花ばかりである・・・

私は、一度屋敷に戻ろうと

思い屋敷の様子を見ると

なんだか切ない・・・

切なすぎて

私の居場所としては、

居られない。

ーラベンダー屋敷ー

「旦那様、旦那様・・・」

「何だか騒々しいな・・・」

悪いけど、私は

今話を聞く心境じゃないのだよ・・・」

「旦那様、はつねさんは、

どうしたのですか？」

旦那様は、黙り込んだ。

「旦那様？」

「はつね君か・・・」

もう二度とラベンダー屋敷には、
戻ってこないだろう・・・」

「そ、そんな・・・」

使用人みんなで

屋敷内を探している

しかしはつねは

どこにもいない。

ラベンダー屋敷から消えるはつね（後書き）

すいません！

今回は短いです

私は、テスト前という

都合で、いつもと同じ文字数は
書けませんでした

旦那様の気持ち（前書き）

話が、よくわからなくなりました。

旦那様の気持ち

ーラベнда屋敷ー

旦那様は、悲しみながら、

自分で入れたコーヒーを味わっている。

孤独な自分の部屋で、

やすらいでいる。

ある使用人が、血相を変えて部屋に飛び込んできた。

「何だ 何だ！

また騒々しい・・・私は、くだらないことにかまっているほど暇じゃないんだよ・・・」

「旦那様、やはりはつねさんが、

どこにもみえません！」

旦那様は、立ち上がった・・・

飲みかけのコーヒーが、少しこぼれた。

「フン、はつね君はもうこの屋敷には、
いないんだよ・・・

いないヤツなど探す必要ない・・・

お前らは、自分の仕事を

進めればいいんだ!」

旦那様は、いつもと違う口調で、
しゃべっている。

絶対にいつもは、

そんなことを言わない・・・

「旦那様、でははつねさんは、

どこに行ったか知っていますか？」

「知らない！」

私は、彼女を屋敷から追い出した・・・
それから、彼女が、どうなったかなんて私は知らん・・・
せれんを守ることができないヤツに

ここにいる資格なんてないからな・・・」

旦那様は、使用人たちに背を向けた。

そして、再びコーヒーを一口飲む。

窓をずっと見ている。

私は正直不安になる。

はつね君が、居なくなったことが

どうにも気になる。

あの時は、我を忘れて、

はつね君を叩いてしまった。

そのことは、彼女に謝らなければならない・・・

そして、怒鳴りつけていた・・・

せれんが、自殺したのは、

私のせいだ・・・

私は、せれんに自分の理想を押しつけた・・・

私の理想である

『穏やかで、上品』をせれんに

無理やり教えていた・・・

そんなことせれんは、

望んでいなかった。

だからせれんは、ストレスが、

たまっていた・・・

そんな疲れきった心を癒やすには、
たくさんの薬が必要だった。

たくさんの薬を毎日 毎日のように飲んでいた・・・

そして、月日が、

経つにつれ

薬という物を覚えてしまい

ついには、

薬に溺れてしまった・・・

薬の飲みすぎで、苦しくなってしまった

せれんは、部屋で首をつってしまった。

わかつている・・・

本当の事情は、ちゃんと知っている・・・

せれんが、自殺したのは、
はつね君のせいなんかじゃない・・・

わかつていることだ！

でも、誰かのせいにしないと、

私の娘せれんにたいする悲しみが、おさえられない！

私は非常に最低だ・・・

自分の中で、悲しみをおさえることが、
できない！

情けない・・・

はつね君には、随分
ひどいことをしてしまった。

はつね君、君にはまだいてほしい・・・
君も、ラベンダーの花が好きだってことは

私も知っている・・・

庭にも、咲いているラベンダーを育てていた・・・

そんなはつね君の素晴らしい姿を

私は、常に見ていた・・・

はつね君もラベンダーが好きなんだろう・・・

ラベンダーが、好きだとは、

せれんと同じだ・・・

はつね君は雰囲気も、

せれんとほぼ瓜二つって言うて
いいぐらい似ている！

彼女を見ると、
せれんは、蘇った。

そして、生きているように

思えてくる。

ああ、はつね君には
戻ってきてほしいなあ・・・

また楽しかった日々に戻るような気にするから・・・

でも、彼女は私を嫌っているだろう・・・

私は、少しショックだった・・・

いつの間にか私以外に部屋には、

誰もいなくなってしまった・・・

孤独の中で、ため息をついている。

♪ピンポーン♪

こんな深刻な気分である時に誰だ？

そう思い鍵を開けるために

慌て玄関まで行った。

「はい、どちら様ですか？

ってはつね君・・・

どうしてここに・・・

それと、となりの方は、誰？」

旦那様は、怒っているっていうより、

驚いている！

「私は、越水七槻と言います・・・

はつねとは、友達であって

親友でもあります！

旦那様に頼みがあります！

はつねをどうかクビになんてしないでください！」

「何言っているだね・・・

君には、関係ないんだ・・・」

「事情は、はつねから聞きました・・・
でも、はつねにチャンスを与えてやってください！」

「すみません！」

私のせいでせれんお嬢様が、
なくなったこと心から申し訳ないと思っています！

別に許してもらえとか期待していません！

ただ悪いことをしてしまったことを謝りたいだけです・・・
いまさら私がずうずうしいですよね・・・」

「いや、本当は、悪いのは私だ・・・」

はつね君を叩いてしまったことを謝りたいんだ・・・

すまん・・・

あと、君には まだラベンダー屋敷で働いてほしい・・・

君は、せれんに似ている！

はつね君を見るたびせれんが、生きているような気がするんだ・・・

だから、せれんの代わりに長生きしてくれ・・・

出て行って言ったけど本音じゃないんだ・・・

わかってくれ・・・」

「ありがとうございます・・・

これからもしっかりと頑張ります！」

はつね・・・良かったね・・・

私は、ちょっとほっとした。

こうして、はつねは、

ラベンダー屋敷で働くことになった・・・

旦那様の気持ち（後書き）

今回は、次ページまでいきました。
評価お願いしますm（
）
）m

あれから1ヶ月後・（前書き）

あれから1ヶ月後の話です・・・
短いです・・・

あれから1ヶ月後・

せれんお嬢様が、なくなってから、

あれからもう1ヶ月経った・・・

私、はつねは、

せれんお嬢様が、育てていたラベンダーの花の世話をしている！

私も、ラベンダーの花を育てていて

とても気持ちいが、安らぐ。

この前のせれんお嬢様の部屋のラベンダーはしおれていた・・・

今現在は、なんとか

美しさを保っている・・・

「はつね君、君のおかげで

ラベンダーが、今も保っているから、

このままがんばってラベンダーを育ててくれよ・・・」

通りすがりで、私の目の前に来る旦那様は、

私をほめてくれる・・・

今のところ私は、

仕事が絶好調である・・・

難しい仕事でも、

皆さんが、私を助けてくれるから、

仕事は、成功している・・・

私の周りには、皆さんがいてくれる・・・

今は、幸せ気分だ・・・

なっちゃんには、また助けてもらった・・・

なっちゃんが、あの時に

旦那様にクビにならないように、

頼んでいこうって言ったから、

私は、勇気を出して

謝ることが、できた・・・

『ありがとう』

ってまた言いたい気分である・・・

今は、初夏になっている！

せれんお嬢様がなくなる前よりも、

空は、青い・・・

そして明るい！

気温も高くなっている・・・

っていうより、暑すぎる・・・

なっちゃんは、あの後

すぐに福岡に戻った・・・

そして、今現在も難事件の

捜査を行っている・・・

福岡は、もっと気温が、高いだろう・・・

それに、台風がきたりして、

調査や捜査が、遅れているみたい・・・

なっちゃんは大変らしい・・・

彼女から最近送られてくるメールは、
そんな内容が多い・・・

今日も、メールがきた。

内容は、やはり同じような事だった。

「今日も暑い・・・

っていうか福岡は暑すぎる！

あと、はつね仕事がんばって・・・」

私も、なっちゃんに送信した。

「なっちゃんも、

探偵としてがんばって・・・

そして、名探偵になってね」

って送った・・・

とりあえず今は、

楽しそうな様子である・・・

あれから1ヶ月後・（後書き）

すみません！

話が短いうえに下手な文章で・

評価お願いしますm（
）m

あれからもう1ヶ月後・（前書き）

話が、おかしくなっています！

あれからもう1ヶ月後・

――福岡県――

せれんお嬢様が、自殺してからもう1ヶ月経った・・・

七槻は、ついに難事件の謎が解けた。

今は、犯人を徹底的に追いつめている・・・

「犯人は、あなたですよね・・・」

「何を言っているんだい・・・」

僕が犯人なわけじゃないか・・・」

七槻は、クスッと笑った。

「いいえ、この事件の犯人は、あなたです・・・
証拠もあります！」

七槻は、証拠品の

黒ずんだカッターナイフを見せる・・・

「これは、あなたの物でしょう？
指紋照合をすれば、すぐにわかるから、

犯行を素直に認めなさい！」

犯人は、追いつめられて、

とても驚いている・・・

その後、すぐニヤリと笑った・・・

「ならば、お前ら全員殺してやる！」

もちろん刑事もな・・・」

犯人は、拳銃を出す。

刑事さんたちも拳銃で、犯人を捕らえようとしている・・・

犯人が1人に対して

警察は大人数である・・・

別に犯人は、気にしずに、

容赦なく拳銃で撃とうとしている・・・

ある刑事さんは、完全に銃口を

向けられている。

もう撃つ！

そんな時に、七槻が、
落ちていた空き缶を拾い

そして、思いっきり投げた・・・

すると、犯人に空き缶が当たった・・・

それは、かなり強い衝撃だった。

犯人は、一発で 倒れてしまった。

七槻の物を投げる威力は

そうとうな物だ・・・

通常は、一発で倒せる・・・

たまに、一発以上くらわないと

倒せない人もいる！

とりあえず犯人は、

警察に捕まった・・・

犯人が、この後どうなるかなど、

誰にもわからない。

「暑いな・・・もう夏か・・・」

「ええ、疲れますね・・・」

やっと事件が解決したあ・・・

暑いなか大変なことばかり捜査しましたね・・・」

「ああ、もう暑い・・・」

刑事さんは、そう言って

日陰のほうへ座り込んだ。

それから、ため息をついた。

また口を開いた。

「はつねちゃんの様子は、心配か？」

「ええ、もちろん・・・」

「またメールすればいいじゃないか・・・」

「うん、・・・」

私は、静かに返事をした・・・

そして、はつねにメールを送信した。

「やっと、難事件が解決したよ・・・」

はつねは、メイドの仕事は、

相変わらず絶好調？

これからも順調にがんばって・・・」

その内容をはつねに送った。

この内容は、はつねにちゃんと送られているかな？・・・

あれからもう1ヶ月後・ (後書き)

すみません！

短いうえにめちゃめちゃな話です

評価お願いしますm (m

一通の手紙（前書き）

本当に変な話になります！

一通の手紙

――七槻の家――

今日は、雨が、大量に降っている・・・
今は、梅雨に入っている・・・

やっと難事件が解決してほっとしている

七槻は、自分の部屋に手紙らしき物が

置いてあることに気づいた。

誰からか気になって宛名をしっかりと見た。

四国の★●県警から、依頼の手紙が、

一通きた・・・

内容は何かな？と思い手紙を開けてみた。

――越水七槻様へ――

あなたに依頼を頼みます。

依頼の用件は、四国のラベンダー屋敷の

本当の事件の真相を解いてほしいです・・・

あの事件は、一見自殺には、見えますが、

他殺っていう可能性もあります！

なぜならば、せれんお嬢様が亡くなった時間に、

みんながアリバイがないからです・・・

もしこの事件が、他殺だとすると、

一番疑わしい人物は、

屋敷のメイドとして働いている

小森はつねさんです・・・

今我々は、彼女を疑っている・・・

理由は、彼女は、自殺した当時まで、

せれんお嬢様と2人きりだったから、

一番犯行が可能だと思います！

真相を突きとめてほしいです・・・

この依頼を受けるか

どうかは、あなたしだいです・・・

とりあえずラベンダー屋敷に来ることを
期待します。

――四国の★●警察本部より――

手紙を一通り読んだ。

七槻は、当然ラベンダー屋敷へ

行くつもりだ・・・

この事件の真相を解いて、
そして、はつねの疑いを晴らす。

あれは、せれんお嬢様の自殺だと、

証明できるようにしなければならない。

私は、一歩踏み出して、
四国に行こうとする。

荷物を全部まとめている・・・

それから、電車に乗って
ラベンダー屋敷がある四国へ向かった・・・

はつね、待っててよ・・・

必ず白だと証明するから．

一通の手紙（後書き）

すみません！

また短い話です・・・

なんかまためっちゃめっちゃになっ
ている気がします！

評価お願いしますm（　　）m

はつねの疑い《前半》（前書き）

短い文章です。

はつねの疑い《前半》

――電車の中――

何もしていない・・・

ただ呆然として窓から、

見える景色を覗いている・・・

景色も今は、実に寂しい！

雨で、窓ガラスが濡れている・・・

そして窓ガラスが、ぼやけている

満足するような景色など、

どこにもない。

暇になる時間私には、何もできない・・・

電車が、はやくしないと

私は、行動できない・・・

聞こえてくる音は、

電車の音だけである・・・

寂しい電車に、何時間と乗ったまま・・・

その間に、はつねは

警察に疑われて またつらい思いをしている・・・

はつねは、可哀想すぎる！

どんな時も、悲しい事件にあってしまふ・・・

はつねの様子をメールで、

質問してみようか！

私は、さっそくメールを送信した。

「はつね、今せれんお嬢様を殺したという疑惑が、あるみたいだけど、

私はその疑いを晴らすから安心して・・・」

もうしっかりと送信されたはずだ・・・

何分間も、メールが来るのを待っている・・・

しかし、いくらなんでも遅すぎる

メールが受信される時間になったのに

まだメールの返事が、かえってこない

七槻には、わかった！

はつねは、メールをするような心境では、

ないことがわかった・・・

警察に疑われて 何もする気には、

なれないだろう・・・

この前事件後に送ったメールの返事もまだ帰ってこない・・・

あの時からとはつねは、
警察に疑われていたんだ・・・

それでも、今まで

耐えていたんだ・・・

いろいろとはつねのことを考えると

可哀想だな、と思う。

電車は、間もなく到着する。

七槻は、急いで電車から、

降りる・・・

ラベンダー屋敷は、確かこの辺りにあった。

私は、はつねのために

雨の中を走った！

雨の中でも、はつねの様子が、

気になる・・・

早く、早くしないと

はつねを助けられなくなる。

やっとラベンダー屋敷に着いた。

前と同じようなラベンダーの

香りが漂ってくる。

ラベンダーの花は、

この前屋敷に行った時よりも

生き生きとしている・・・

これは、お嬢様の代わりに、
はつねが育てたんだろう・・・

なんかしみじみとしている

しかも、風情がある。

この香りに誘われて
ラベンダー屋敷の中へ入っていく。

中には、警察が捜査をいる・・・

「私も、捜査に参加させてもらいます！
いいですか？」

「ああ、別にかまわんが、
くれぐれも邪魔するなよ！」

警察は、黙って捜査をする・・・

「では、私は、なくなったせれんお嬢様の部屋を
調べさせてもらいます！

旦那様、いいですよね・・・」

「ああ、かまわんが・・・」

私は、せれんお嬢様の部屋を

重点的に調べた。

はつねの疑いを無くすために・・・

はつねの疑い《前半》（後書き）

次は、捜査する話だと思います！
評価お願いしますm（　　）m

はつねの疑い《中編》（前書き）

文章が短いです。

はつねの疑い《中編》

―せれんお嬢様の部屋―

ラベンダーの花は、

この前とは比べものにならないぐらい

美しくそして、きれいに咲いている・・・

「ねえ：はつね 自殺した当時、この部屋の鍵って掛かっていた？」

「うん、しっかりと掛かっていたよ・・・」

実は、私が、部屋を開けたんだ・・・」

「じゃ・・・はつねは、せれんお嬢様が自殺した当時に
鍵を持っていたんだね・・・」

「うん・・・」

「えっ・・・と窓もしっかりと閉められあるね・・・
つまり、この部屋は、密室だったってことになるよ・・・」

七槻は、はつねとしゃべりながら手袋をはめる。

七槻は、部屋中の物を調べている・・・

部屋には、ちよつと枯れたラベンダーの花も落ちている・・・

葉も、ばらばらになって散らばって落ちている・・・

七槻は、落ちている物を

慎重に袋の中に入れる。

はつねは、不安な表情で、
私の様子を見ている・・・

今、はつねは、この雨と同じように、

気分が、暗くなっている・・・

部屋の外からも、心配しているメイドの人たちも、

自分のことのように
はつねを心配している・・・

私は、はつねには

大切な仲間がいてくれて、

ちよつとは、幸せだと思う。

私は、またなっちゃんに助けてもらっている・・・

なっちゃんは、必死になって
捜査を行っている・・・

警察の人々も、

この部屋を徹底的に調べている・・・

その間、私は何もできない・・・

2人とも私のことに
必死になってくれる。

旦那様も陰から私を
見守ってくれている・・・

みんなこんな私に優しいなあ…

私は、みんなの

役にたっていないのに・・・

なっちゃんなんて、
わざわざこんな雨の日に

福岡から、四国まで来てくれた。

なっちゃんは、雨で濡れている・・・

靴下まで濡れている・・・

こんな雨の中なっちゃんは、
走ってラベンダー屋敷まできたんだ。

またなっちゃんには、
感謝でいっぱいだ・・・

私は、自分のために
支えてくれる人々が周りにいてくれて幸せだ・・・

本当は、このままずっとみんなに
支えてもらいたい・・・

でも、これからは、
自分でなんとか、いろんな事を解決したい・・・

そして、なっちゃんのように人助けが、
できる！

そういう人に私も

なりたい・・・

はつねの疑い《中編》（後書き）

すみません…

私の都合で、長い文章は書いていません
評価お願いしますm（　　）m

はつねの疑い《後半》（前書き）

久しぶりの投稿です。つじつまが合いません。

はつねの疑い《後半》

薬は床に散らばっている。

次から次へと薬が

見つかる。

それぞれの薬を調べてみると

別々の物が多い。

これはおそらくお嬢様はいろんな薬を

飲んでいたということになる．．

そして薬の飲みすぎで

苦しくなってしまったってところだろう．．

薬に溺れたこと

どうやら本当の話だったみたいだね．．

床の周りをよく調べた。

せれんお嬢様が好きなラベンダーの花が咲いている。

ラベンダーは部屋中に香りを漂わせて

ひきつけている。

ラベンダーの花その物も異様に焼きつく。

この部屋の中で一番目立っている。

そして希望があると信じることができる。

光を持つ花。

何かラベンダーにありそうだ！

だから私はラベンダーの周りに

手がかりがあるんじゃないかと思い

何か落ちてないか調べてみた。

「刑事さん、これは何でしょうか？」

私は枯れた花と葉を

差し出した。

「ん・・・これはラベンダーの花じゃないか？」

すっかり枯れちゃったなあ・・・」

これがラベンダーの花：

ちょっと信じらんないなあ・・・

今日のように天候が

雨でも美しく咲き誇っている

ラベンダー。

そんな美しい花が

床に枯れた状態でおかれているなんて

かわいそうだ・・・

お嬢様のように少しの

生命しか持たない。

なにか儂さを感じた。

でも床に落ちていなくて

ピンピンとして咲いている

ラベンダーもある。

それは枯れた状態の花を

はつねが1日も欠かさずに

丁寧に育ててくれたのだと思った。

はつねがラベンダーに新たな生命を

送ったような気がした。

最初はかけがえのない花だったけれど、

光輝くこともできる！

私はラベンダーを見てそうとらえた。

ラベンダーにたとえて、

高校生時代のはつねを

思い出すような気分だった。

はつねのメイドになりたいという願望から、

せれんお嬢様と旦那様に認められ、

ラベンダー屋敷で働くことも

せれんお嬢様のお供という任務もできた。

そして今は仕事では、

みんなに期待されている。

はつねとラベンダーが重ね合わさって見える。

私はラベンダーに問いかけるように

『はつねに育ててもらって良かったね…』

さりげなくつぶやいた。

私のつぶやきは、刑事さんには

全く聞こえていないみたい…

首をかしげて?? っていう感じである。

はつねには聞こえたかな？

七槻は、はつねのほうを見る。

それから捜査を再び続行した。

一つ一つこまめに調べている。

鍵のかけ具合とか

鍵が置いてある位置など

しっかりと把握などを

している。

外から誰かが侵入した可能性もあるから、

窓のほうも調べてみた。

窓ガラスはネジでしっかりと固定されている。

ネジがとれるっていう心配も

ない・・・

窓ガラスにもなにかの細工なんて

見つからない。

しつこく調べたが、

そんな変な痕跡は全くない。

爪のあとを調べたり指紋照合をした結果、

はつねとは違っていた。

しかも一致したのは、

せれんお嬢様の指紋だった。

ネジの腐食具合も調べたが、

通常どおりだった。

誰もいじくった様子はない。

このことから、

はつねは窓ガラスには

近づいていないことが

わかった。

でもドアを使ってトリックを

行った可能性もある。

悲しいが、せれんお嬢様を殺して密室を作ったという可能性が

ないとは言えない。

もちろんそんなことはありえないと

思っている。

探偵は捜査のために

それがたとえ親友でも

疑わなければならぬ。

私は思いつめられた顔で

捜査をしている。

ドアのノブに仕掛けをしたあともない。

ノブには指紋は残っている。

まあそれは当然だ！

はつねは、この部屋に出入りしていたから……

私は手袋をつける。

仕掛けの糸なども発見しなかった。

ノブに残っている傷あとも

古い傷である。

「なっちゃん、なにかわかったことはあるのか？」

「ええ。いろいろとわかりました。

これはせれんお嬢様の自殺でしょう……」

「その……根拠は

なんなんだ？」

「いや、しらべれば調べるほど

自殺だと思うのです。

ここの窓から飛び降りて脱出は

できそうなんですけど

ネジでしっかりと止められているみたいなんです。

あとからネジを付けた様子も全くありません。

金槌でネジを固定したならば、

必ず近くにへこんだようなあとがあるはず

ですからね：

でもそんな痕跡は、

ありません。」

「確かに・・・

何もいじくられていないようだなあ…」

刑事さんは、窓ガラスに顔を近づける。

はつねと旦那様だけ部屋に残っている。

あとの使用人たちは、
自分の仕事をやりに行った。

使用人たちは、みんな七槻なら

きつと事件を解いてくれるだろうと

期待していた。

私の疑いを晴らそうと

いろいろと調べてくれたなっちゃん。

また助けてもらった。

嬉しかった。

「あとは、ドアに残っている傷あとも

自然についたものだと思います。

その証拠に傷が古びています。

つまりはつねは、密室トリックのための

仕掛けなど全くやっていないんですよ…」

「ほう・・・仕掛けが見られないっていうことは、

単純にお嬢様の自殺っていうことか・・・」

「動機は大量の薬からわかったことで

薬に溺れて限界だったところかな？

どっちにしろトリックっていうのは必ず痕跡が残っているはず・・・

痕跡が全くないなんてありえない。

自殺なら例外だけだね。

これは、せれんお嬢様が自分で首を吊ってなくなった

自殺以外に考えられません。」

七槻は、自殺だと完全に言い切った。

「でもそれだけじゃ

何の証拠にもならん！」

「証拠ならあります。」

私は、お嬢様の遺書の一ページを見せた。

『私は、自分の生活に縛られる毎日に嫌気がさした。

私は求めているものそれは、快感。

快感を味わえるものは薬だけ。

私は薬を毎日のんでいる。

最初のうちは何も変化はなかった。

しかし慣れていくと

あまりにも極楽すぎて倒れそう．．

もう自分が見えなくなるぐらいだ。

しだいには快感が苦しみにも

変化している。

苦しい．．．

つらい．．．

この今の苦しみから逃れたい。

だから私は死ぬ．．

こんな私に親身にしてくれたはつねさん
ありがとうございます。』

この文章を呼んだはつねは、

思い出して泣いた。

自分がお嬢様を殺した容疑者だと疑われていることも
忘れて泣いている。

刑事さんにも、この文章が

お嬢様本人のものだとわかった。

お嬢様の文字は知らないけど、

なんとなくお嬢様の気持ちが

伝わっていく。

お嬢様はつらい思いをして

自殺を決意したことが

わかった。

旦那様は無言で部屋から出た。

決して涙だけは見せていなかった。

刑事さんはこの真実が切なくて

切なくて

しょうがなかった．

はつねの疑い《後半》（後書き）

すみません。つじつまが合わないうえにとんでもない文章何で・・・

私の話ってつじつまが合っていない気がします。

評価お願いしますm（　　）m

疑いが晴れたその後は・・・(前書き)

疑いが晴れた後の話です。

疑いが晴れたその後は・・・

「この事件は、せれんお嬢様による自殺ですよ…」

七槻は、この事件はお嬢様の自殺だと語った。

刑事さんは遺書を読んで、

せれんお嬢様が自ら命を絶ったことが

わかった。

はつねはせれんお嬢様の自殺について

改めて聞かされて

うつむきながら泣いている。

「これは、はつねさんによる犯行ではないようだ。」

この遺書の文字と普段のせれんお嬢様の文字が、

ピッタシ一致した。」

他の刑事さんが言った。

どうやら刑事さん同士でしゃべっている。

「じゃあ、これをお嬢様による

自殺だと認めてもいいんだな？」

「ああ……。」

「自殺で決まりだな！」

殺人事件じゃなくて安心したなあ。」

刑事さんたちはほっと一息ついた。

私も安心した。

これでとりあえずはつねの疑いは

晴れた……

少しせれんお嬢様について、

心残りなことがあるが、

まあ疑いが晴れて一件落着。

トント

ドアをたたく音がした。

「はい、誰でしょうか!？」

「あ、刑事さんですか？

はつねさんが

せれんお嬢様を殺したという疑いは、

晴れましたか？」

他の使用人多数が、部屋に訪れた。

「ええ……はつねさんの疑い晴れましたよ。

しかも福岡から訪れてきた彼女のおかげでね……」

七槻のいる方向へ指を指す。

「その子は誰なんですか？」

「彼女の名前は越水七槻っていうんだ。

彼女は今まで探偵として

難事件でも解決していったんです。

確か高校生ぐらいから

いろんな事件に顔を出すようになったと思いますよ。

そしていまや名探偵になった。

今も相変わらず名探偵として、

あらゆる難事件を解いていつている

本当に彼女は頼もしいですよ…」

刑事さんたちは私のことを物語っている。

刑事さんと使用人の間に

なにやらものすごい会話の世界が

広がっている。

「あ、話に夢中になって忘れていました！

夕食作りしましたのでどうぞ刑事さんたちも
遠慮しなくていいですよ…

もちろんとなりにいる名探偵さんも・・・」

「ええ……あ、はい……」

私たちは食堂へ行った。

「なっちゃん……」

はつねが小声で七槻を呼んだ。

「何……?」

「私のためにわざわざ福岡から来てくれたこと感謝しているよ…
ありがとう。」

「うん。」

私たちは外の景色を眺めている。

外はすっかり暗くなり、

雨もやんでいた。

花壇の花には、雨の水滴がついていた。

ラベンダーは、

さっきと変わらないまま…。

美しさを保っている。

私とはつねはお嬢様の部屋から出た。

そしてみんなが集まっている食堂へ

向かった。

食堂へ入った瞬間、

私は驚いた。

なぜならば

四方八方どこ見ても、

豪勢な食事が多い。

しかも何人ものシェフの人びとが、

料理を作っている。

お金持ちの屋敷だから、

シェフが何人も仕えていたって

不思議ではない。

しかし、お金持ちではない七槻から

してみればシェフ付きは

びっくりであるみたい・・・

「では、どうぞご遠慮なく好きなだけ
食べてください。」

七槻はどれから食べればいいのか

迷った。

とりあえず適当に食べている。

「なっちゃん・・・あのさ、

いつ福岡に戻るの？」

「ん・・・明日には戻るつもりだけど・・・

はつねの疑いも晴れたことだし・・・」

はつねは急に表情が暗めになった。

「今、天気どうなっているかな？」

「えっ・・・はつね急にどうしたの・・・？」

「今日の天気で朝、雨降っていたじゃない。

高校の卒業式の日の時みたいに

久しぶりに星を見てみたいんだ・・・

ここでせれんお嬢様の分まで生きていくこと

星に誓いたい・・・。

でも、今日は雨だったから星がみれないかもしれないね・・・」

はつねはとても残念がっていた。

「じゃあ、はつね夕食を食べ終わったら、

庭に行つて星があるかどうか

見に行こう！」

「うん。」

はつねは、楽しみにした。

思い出すと卒業式前ぐらいから、

いろんなことがあつたなあ・・・。

なっちゃんに助けてもらつたり

卒業後は憧れのせれんお嬢様のもとで

働けたり、

本当にいろいろあつたわね…。

なんかそれまでの日々が

懐かしく思うわね：

ラベンダー屋敷で働くようになってから、

旦那様、甲谷さん、

使用人多数、

などと出会った。

そしてせれんお嬢様とは、

幼いころ四国へ旅行に行った時以来、

再び会った。

私はいろんな人と

出合い　そして、

楽しかった時もつらかった日々も

あった。

それは今となっては、とても懐かしい。

「はつね・・・はつねってば・・・」

「何？ なっちゃん！」

「何？ じゃないよ・・・」

星見ようって言ったのはつねじゃない。」

「ごめん・・・なっちゃん。」

ちょっとほか事考えていたわ。」

「ふーん。まあいいや…
とりあえず外に行こ。」

「うん。」

私たちは外へ出ていった。

外はとても暗い。

そう、真っ暗闇になっていた。

私は、空を見上げた。

空は、朝とは全く違い

少しだけ星が見られた。

卒業式の日と同じように

天候は良くなって、

星が見られた。

あの日のように流れ星はなかった。

しかし、星はきれいに輝いている。

「今日は見られないと思ったけど、星あったね。」

見えて良かったよ。

星を見たの久しぶりだからね…。」

「うん。星きれいに輝いているね…。」

ねえ、輝き続けるたくさんの星よ…。

私はお嬢様の代わりに

なるように頑張って生きていくよ。

命を絶ったお嬢様のことも

絶対に忘れないよ…

私は、これからもラベンダー屋敷で働く。

不安だけどいろんなこと乗り越えていくよ…

私は星に決意した。

しかし、その決意も

近いうちになくなるのであった。

疑いが晴れたその後は・・・（後書き）

めちゃくちゃとんでもない話ですみません。

おそらくワケがわからないと思います。

評価お願いします

m (m

怪しい人物、彼女たちにせまってくる…（前書き）

途中わかりにくいです。

怪しい人物、彼女たちにせまってくる…

私は、たくさんの輝いている星を

眺めた。

それはとてもきれいだった。

私は星を見た後、

はつねと一緒に食堂へ行った。

その時に背後から何者かが、来る気配がした。

はっきりとはわからない。

しかし夜道を1人で

歩いている人がある。

顔は暗くて見えない。

ただこのラベンダー屋敷に

近づいていることは、

わかった。

その者は怪しい行動をしている。

キョロキョロとあたりを見渡している。

何か目的かはわからないけど、

行動が怪しくて気になった。

私はたまに後ろを向いては、

怪しいヤツを

睨んでいる。

「なっちゃん、どうしたの？

さっきから怖い顔をして……」

「ううん……

別になんでもないよ……」

私には感じる。

あの人は絶対に何か

災いをもたらす。

その災いが何かとは定かではない。

しかし、厄介な事件を起こす。

そんな予感がした。

しかし、事件は次の日に

起こるとは

思わなかった・・・

いや、予想しなかった。

それは七槻も

明日事件が起こるとは

考えもしなかった。

怪しい人も黙って私たちを

睨みつけていた。

私はイヤな予感がして

たまらなかった。

――はつねの部屋――

ここには七槻とはつねがいる。

彼女たちは、今の自分たちについての
会話を交わしている。

「なっちゃんは、事件解くのとて、
難しかった？」

「えっ…まあ難しかったよ…
はつねのほうもいろいろと

大変そうだね。」

「そりゃ・・・

最初のほうはただの
部屋掃除だったからね。

雑用みたいなもんだったから。

今は、せれんお嬢様が

好きなラベンダーを
育てているんだ。

まあラベンダー以外の花も

育てているけどね…。

庭に咲いている花なども

全部私が育てているの。

まあ庭師になったわけじゃあないからね。

あとは、身のまわりのことを

手伝っているんだ。

なっちゃんは探偵の仕事はやっていてどう？」

「ん…好きで探偵やっているから

事件が無事解けた時は、

探偵やって良かった…

って思うよ。

でも逆に犯人に逃げられた時、めちゃくちゃ悔しいよ。

あと犯人が自殺した場合とかも悔しいね…

だから探偵は、常に犯人の行動には気をつけているんだよ…」

彼女たちの会話は広がっている。

七槻とはつね。

彼女たちは2人で

ずっと語り合っていた。

はつねの部屋の窓からも

星は見える。

ちょっと遠くで見ているから

星は小さく見える。

でも星の輝きは変わらないまま。

とてもきれいで美しい。

窓ガラスにうつった輝きを

私達はしばらくながめていた。

このときばかりは七槻も

怪しい人物のことを

忘れて窓ガラスから、

夜景を見ていた。

――翌日――

今は朝。

今日は晴れている。
濡れていた地面も

すっかり乾いた。

庭に咲いている花は、

太陽にあたっている。

地面も太陽でとても熱い。

七槻とはつねは早く起きた。

はつねは起きたらすぐに

せれんお嬢様の部屋に行き、

ラベンダーの花の水やりをした。

ラベンダーの花一つ一つていねいに

水をあたえすぎない程度に

気をつけている。

はつねがラベンダーの花を

せれんお嬢様のように

おもっていることが

伝わった。

はつねは、しおれかけて下を向いている

ラベンダーの花を手で上にあげた。

手で支えている花に

何か語りかけたそうだった。

このラベンダーの生命力ってすごいね：

その気になれば

どんなに枯れそうでも

生きのびていく。

せれんお嬢様だって、

自殺なんてしなければ

生き続けたかもしれない．．

ラベンダーとお嬢様は、

重なってみえる。

本当にせれんお嬢様は、

ラベンダーの花にふさわしい人だった。

せれんお嬢様は自殺した．．．

思い出すたびさびしくなる。

ラベンダーの花をながめてみると

お嬢様が見えていく気がするけど、

本当のお嬢様はもういない．．．

そう思うと悲しくなる。

せれんお嬢様の代わりとして

私がたくさんがんばっても

せれんお嬢様はもう戻ってこない。

この悲しさは変わらない。

せれんお嬢様・・・

やっぱり、ここに戻ってきてほしい・・・

一緒にしゃべりたいことが

たくさんあるのに・・・

お嬢様は私たちの居場所を捨てて

違うところへ逝ってしまった・・・

なんで……

なんで、お嬢様は自殺なんて

してしまったの・・・？

はつねは密かに涙を

流している。

微妙にひと粒の涙のしずくが見えた。

しかし水やりはおろそかには

しなかった。

部屋のドアを開けて

はつねの様子を見ていた。

私には、はつねの悲しそうな姿を

黙ってみることしか

できなかった・・・

外は明るくて太陽も

まぶしくてちよつと暑い。

しかし七槻には

窓ガラスからみえる景色が

昨日の夜より

暗く見えた・・・

昨日の夜の怪しい人物と

同じ感じがした。

私は遠くの位置から

庭を歩いている人物を

じつくりと見た。

その人物はヒゲが生えている

少々小太りなおじさんだった。

一見その人は普通の人に見える。

しかし七槻には決して

普通の人に見えなかった。

その男は険しい表情で

屋敷に入っていく。

彼はラベンダー屋敷に

近づいている。

あともう少しで

屋敷に入ってしまう・・・

怪しい男はついに屋敷に入ってしまった。

そのことで事件が起こることなど、

予想もつかなかった・・・

怪しい人物、彼女たちにせまってくる…（後書き）

すみません…。

話がイマイチです。

評価お願いします

m (m

迷いの心を持つ怪しい者（前書き）

めっちゃくちゃ下手です。

迷いの心を持つ怪しい者

昨日私たちの背後にいた男は、

清掃業者の格好で

ラベンダー屋敷へ入った。

私には清掃業者には見えなかった。

清掃業者を装っている人に見えた。

なぜならば関係のない清掃業者が私たちを

睨んだりしないと思うから．．

私は窓からその男を見た。

外にいる時も彼は睨んだ表情で

険しい顔になっていた。

何かを決意した表情だった。

一体何をここでやりだすのかわからない。

その男の目的は、何かわからない．．．

私はその男の様子を見るため、

こっそりあとをつけている。

そしてせれんお嬢様の部屋から出た。

「なっちゃん…どうしたの？」

「さっき屋敷に入っていた怪しい男のあとをつけているの…」

あの男見るからに怪しいのよ。

昨日も私たちを睨みつけていたのはあの男だよ…。

そんな男が清掃業者の格好をしていたら

怪しいでしょー？

屋敷内で何をやらかすのかまったくわからない…

行動パターンもよめない。

十分危険なヤツだよ…。」

はつねと小声でこそこそ、しゃべっている。

私は音も立てずひたすら

清掃業者に装った男を偵察している。

彼は私たちの前を横切っていく。

そう風のように．

いや、木枯らしのように．

怪しい男は、横にいた私のほうは

振り向かなかった。

気づかなかったのだろうか！？

いや…気づいていたけど振り向かなかったのか・・・

私には怪しい男のその考えは、

推理しても謎である。

ただ彼から険しそうな雰囲気は

漂っている。

顔つきも

怒っているような厳しいような

感じだった。

怪しい男の眉は微妙にあがっている。

彼は目先にある目的にだけ、

集中している。

そして目先にあるもの一つだけ見続けている。

私も怪しい男の行動を
見逃さずに見ている。

怪しい男は目的の場所に一直線

キョロキョロもせず、

最初からラベンダー屋敷を知っているかのように

一直線に進んでいく。

一歩……そして二歩と

進む！進む！

徐々に目的地へと近づいている。

目的地へ目を向けている怪しい男。

一瞬たりとも見逃さず

ずーっと見ている。

彼が目をむけている場所の近くも

しっかりとマークしている。

怪しい男の歩く動きは突然止まった。
彼は思いつめられた表情に変わっていた。

さらに眉があがってくる。

部屋に入るか入らないか迷っている。

暑さのせいか汗を大量にかいている。

それに初夏に長袖の服を着て汗をかいている。

でも彼には違う汗も流れている。

部屋に入るのを誰かに見られているのかと思うと

不安で不安でたまらない・・・

今までキョロキョロしていなかった

怪しい男は、

急に顔を左右にふって、キョロキョロし始めた。

少しの間だけ

あっちを向いては、キョロキョロ

こっちを向いたりキョロキョロしていた。

私たちは、その間は

物入れ小屋に隠れる。

見つかるどうか不安でドキドキしている。

緊張している。

隠れている物入れ小屋からこっそり覗いては、

怪しい男の行動にもドキドキしている。

その怪しい男も目的の部屋に入るか入らないかの迷いで、

汗をかきながらドキドキしている。

誰かに見られたらラベンダー屋敷に入ってきた計画は

すべて無駄になってしまうのが、

怖い……。

しかしこの部屋に入らなければ

ここに（ラベンダー屋敷）にきた

意味がない。

どちらか決めなければならない。

部屋のドアのノブのほうに

手を伸ばす。

怪しい男は、ノブを握ったまま。

ノブの部分も手の汗ですべる。

時間が徐々に過ぎていく。

人が自分の近くに来るような気がして不安。

妙に緊張ばかりしている。

怪しい男は息をゴクリと飲み込んだ。

そして目をつぶり、部屋の中へと入った。

ドアを閉める時の音は大きい。

私たちが隠れている物入れ小屋まで

響きわたる。

私たちは物入れ小屋からすぐに出た。

部屋に聞こえない程度な音で、

カギが閉まっているか確認した。

カギはしっかり閉まっている。

中にははいれない状態だ。

彼は部屋の中で何をやっているのかわからない。

ごそごそと鈍い音が

何度も何度もかすかに聞こえてくる。

なんの音なのか気になった。

しかし部屋の中の様子がわからない。

誰の部屋なのかもわからない。

私は怒っているような目つきで、

部屋と廊下の境目の

部屋のドアを睨みつけていた。

本当は部屋のドアを睨みつけているわけではない。

・
ドアの向こうにいる昨日の怪しい男を睨みつけてつけているのだ・

七槻が怒りが溢れている表情になったのは、

あの事件以来だ！

はつねが学校の先生に誘拐された時も

七槻はいつもと違う表情だった。

完全に怒っていた。

口調も違っていた。

その時と同じ．．

今七槻は怒りに満ち溢れている。

怪しい男の不審な行動は何か目に余る。

目的さえも謎なヤツだけと

何かとんでもなく厄介なヤツであるような気がする。

はつねに関係するような予感がする。

それはただの感。

でもまさかその感は、的中するとは思わなかった。

そしてこの男の不審な行動が

はつねが自殺した最初の原因になるとも
思ってもいなかった。

迷いの心を持つ怪しい者（後書き）

わけのわからない話ですみません。
評価お願いします

m (m

怪しい人物の行動（前書き）

短いです。

怪しい人物の行動

怪しい男は部屋の中

そのときどこの部屋かは覚えていなかった・・・

怪しい男が入った

部屋はせれんお嬢様の部屋だとは

気づかなかった・・・

私とはつねは部屋の外

部屋の外から怪しいやつが中で何しているかを

確かめるためにドアのほうに耳を傾ける。

なにやら、ごそごそと大きな音がする。

派手な音が鳴らされている。

ギシギシと何かを切る音

とても激しい。

窓を開ける時の途切れたような音も響く。

風の音も聞こえる。

何かを落としたような音も聞こえる。

部屋の状況が見えない私たちには

怪しいやつが部屋で何をしているのか

わからない。

「なっちゃん・・・」

さっきから妙な音がするけど何の音かわかる？」

「うーん…状況としてわかることは、

窓を開けているってことかな・・・？」

もうひとつわかることは、

ペンチで何かを切っていることかな……。

何か固いものを切っているみたいだね……。」

「何を切っているの？」

「そこまではわからないわ。

音はギシギシと響いているから、

ペンチでものを切っていると思うよ……。

ただひとつだけ疑問はあるよ。

なぜ窓を開けたかはわからないけど・・・

窓を開けたことと切られている固いものは、

関連しているみたいだね……。」

「なっちゃん・・・

例の怪しいやつが部屋から出てくるみたいよ。

物置小屋に隠れたほうがいいんじゃない？」

はっねは小声で話しかける。

「うん……わかったよ。

早く隠れないと見つかってしまうからね。」

私たちは音もたてないで素早く隠れた。

怪しいやつが部屋から出てきた。

一步一步慎重に歩いている。

相変わらず険しそうな表情をしている。

怪しいやつは私たちの近くを

通ってていつてどこかへ消えた。

七槻とはつねは隠れていた小屋から出た。

そのときにはすでに怪しいやつはいなかった・・・

屋敷付近を見回したが

少々小太りの怪しい男は私たちの知らない場所へ消えた・・・

怪しい人物の行動（後書き）

この小説最近更新していませんね…。

久しぶりです。

なのに短いです。

たくさん書く時間がありません

評価お願いします

m (m

調査く複雑に重なる事件

どこか遠くへ消え去った怪しい人物

名前は分からないまま

ただ覚えていることは少々小太りな男

清掃業者の格好をして自分の身を覆い隠していた。
それだけは記憶していた。

私とはつねは怪しいやつが侵入した部屋に入った。
すると窓は閉まっていた。

閉めきり状態でとても暑い。

自分が用意したうちわであおいだ。

部屋には何か違和感を感じる。

しっかりと閉まっている窓

部屋の隅に一ミリもずれがなく真っすぐに置かれている小道具

部屋の片隅に置かれているラベンダーの花

一瞬見ただけでは普通に見える部屋

しかし目を凝らしてよく見るととてもなく違和感を感じる部屋

ラベンダーの花が置いてあるってことはせれんお嬢様の部屋なのか

な・・・

私はラベンダーの花をよく調べてみた。

もしこの花がせれんお嬢様のものならば

生き生きとした状態で咲いているはず・・・

せれんお嬢様が自殺してからはずねが、毎日のように一生懸命自分のすべてをかけたように育てた花だから・・・

ラベンダーの花にははずねのすべての思いがこもっている

そんな思いがいっぱいなラベンダーの花は世界で一番きれいに決まっている。

育て方が上手いとかそういう問題ではなくて花に愛情がこもっているからきれいに見える。

私は知っている

はずねがラベンダーの花にどれだけの思いを詰め込んだのかを・・・

はずねはせれんお嬢様が自殺してショックすぎる気持ちを押し殺してまで前向きにラベンダーの花を育てると誓った

一見なんとなく咲いているように見えるけど本当は重みがぎっしり詰まっている花

はずねの育てたラベンダーは私の中では世界で一番きれいな花に見える。

私は花を慎重に調べた。
まだ生き生きとして育っていた。

ラベンダーの花はいつもどおり香りを漂わせて咲き誇っている。

この部屋に咲く花はものすごくきれい

華やかに咲き続ける

まずこの花ははつねが育てた花だと予想される。

ラベンダーの花は生き生きと咲いている

これがはつねが育てているラベンダーの花としたらここはせれんお嬢様の部屋ということになる

せれんお嬢様の部屋にはラベンダーの花がきれいに咲いているからね……

先ず犯行現場はお嬢様の部屋と思われる

あとは、あの男の目的が何か見つけることだ

おそらくあの男の目的はこの部屋の中に隠されている

どうやら部屋をしっかりと調べた方がいいみたいだね……

私は窓を調べてみた。

窓を調べるために開けようとした。

しかし全然窓は開かない

窓は完全に閉められている
開けようと思っても開けられない

「なっちゃん、窓開かないの？」

「うん、なんか完全に閉められているんだ。
開けない」

「あと、何かわかったことはある？」

「あまり情報がないんだ・・・ただわかることはここはせれんお嬢
様の部屋だということ
この窓が目的を見つける重要な手がかりなんだけど・・・

肝心な目的がわからない・・・」

「かなり難しいようね・・・」

あの男は一体何を犯したんだろう
それが謎になるね・・・」

悩み込む七槻とはつね

考えても答えは導かないまま

しばらく考え続ける。

プルルルル

七槻の携帯電話の音

私は何気なく電話にでた

「はい、もしもし…越水ですけど・・・」

『越水？じゃあ君は事件の調査に貢献しているあの高校生探偵といわれた『越水七槻』か？』

「えっ、はい…そうですけど・・・」

『いつも矢部が世話になっているなあ…』

「ええ…まあ。」

『雑談はこの辺で置いてといてまた難事件が発生したんだ

警察が悩みに悩んでも謎は解けなかったみたいなんだ。急にだけど、悪いが事件の調査手伝ってくれないか！！

一日も早く事件を解かないと人が次々と殺されてしまうんだ。

今、福岡に毎日のように犯罪を犯す連続殺人犯が潜んでいるんだ』

今から福岡に行くの？

でも今のこの事件もほかっておくわけにはいかない

あの男の目的がわからないまままで終わらせたくない・・・

かといって連続殺人犯を見逃すわけにはいかない…。

連続殺人犯は毎日のように殺しを行っている

そんなやつを野放しにはできない

これ以上犠牲者が増やしたくない

私は一体どっちを選択するべきだろうか？

確かにあの男の目的を見逃たままにすると何かが起こるような気がする。

しかし福岡で殺しを繰り返す殺人鬼を見逃すわけにはいかない。
このままだと犠牲者が増え続けるだけだから・・・

今は、一応福岡の事件を調査することを優先にしないと人々が亡くなってしまう

福岡の事件を1日も早く解決させたい

そのためには私も調査に参加しないと解決の道には導かれない

私は決めた！！

福岡に行って事件を1日でも早く解決する

そして、解決後にこの部屋であの男の目的を見つけだす

七槻は立ち上がった。

「なっちゃんどうしたの？」

「ごめん、はつね…福岡で起きている事件が大変なことになっているんだ・・・

私福岡に行くから事件を解決したらすぐに戻って来るからね…
とりあえず福岡に行くわ。

じゃあね…はつね」

「えっ、ちよっとなっちゃん・・・」

なっちゃんは私の声を聞かずにすぐに部屋からでた

なっちゃんは福岡へ向かう

自分自身このあと、とんでもない事件が起きるとは予想もしなかった

調査く複雑に重なる事件（後書き）

久しぶりの投稿です

世界止めてpart-2の投稿ばかりでこっちはちよつとずつの投稿です

一応、越水七槻☆高校生時代く殺意を抱いた今までの作者でもあります

自分の書いている小説なので、とりあえず責任持って投稿はします
ちなみに矢部っていうのは刑事さんの名字です

私が勝手に考えました

評価お願いします

m ((m

半年間（前書き）

今回は半年の間の流れについてです

半年間

七槻は地元福岡へ帰った。

そう、はつねを置いたまま…

はつねは正直戸惑った。

何だか心に穴がぼっかりと開いたような感じだった。

取り残されたはつねは部屋にこもったまま

何かをしたくても何も手がかかない。

ただなんとなく時間だけが過ぎていった。七槻がいなくなってからあの男が部屋で何を犯したのか迷宮入りになった

あれからずっと七槻が抱えている事件も解決されないまま
福岡で起きた事件も迷宮入りな状態

せれんお嬢様の部屋で起きた事件は放置されたままで福岡で起きた事件はまったく区謎が解けないまま、半年が過ぎた。

その半年の間はつねはいつもどおりメイドの仕事を言い、そしてラベンダーの花を育てていた。旦那様にも信頼されていて特別はつねにとって悪い事は無かった。

ラベンダー屋敷は、何事もなく平和だった。

しかし一つだけ気になった事があった。

それは七槻がラベンダー屋敷に来なくなった事…
それだけじゃない。

七槻からのメールもこの半年の間まったく無かった。たまにはつねからメールを送信していた時もあった。

しかし七槻からのメールは返信されなかった。電話をかけた時もいつも留守電になる

七槻の様子がまったく分からなくて半年の間とても困った。

多分事件が難しくて捜査の方も忙しいのだろうと予想されるがでもやっぱり七槻のことが心配でたまらなかった。

たまに自分の携帯電話とにらめっこして新着メールが来る事を期待していた。

しかし期待しても七槻からのメールはまったく受信されていなかった。：。はつねは半年の間寂しそうだった

七槻の様子が気になってしょうがなかった。

毎日毎日七槻の様子を気にしながら仕事をしていた。

そんなあの日、見知らぬ訪問者が現れた

そう、だいたい高校生ぐらいの男が玄関先に警察とともにいた。

このときはつねには直感した。

“このあと何か自分に関わる事件が起こる”

はじめてその高校生を見てだけで違和感を感じた。

しかしその直感が見事に当たった。

これが七槻の復讐劇の始まりの原因となった。

半年間（後書き）

これからあることが発生します。

更新が遅れてすいません

一応こっちも時間を見つけて更新しますのでよろしくお願いします
次の更新はたぶん勝手な都合により2月のテスト終了後に更新します
今のもう一つの連載終了後にこの小説も定期的に更新したいもんで
すね

評価などお願いしますm（　　）m

北の名探偵（前書き）

いよいよ時津登場
でも、口調が微妙…

北の名探偵

誰か来た・・・

私はその人物にまったく見覚えがない

どこからどう見ても普通のどこにでもいるだろうと思われる高校生でも、なにやらこの高校生を見ているとただ者じゃなさそうな気がする

そりゃあ警察連れの高校生なんて普通居ないだろう・・・
こりゃあ何かあったとしか思えない

それにしてもこの高校生一体うち（ラベンダー屋敷）に何しに来たのよ…。

警察連れってまた何か事件があったの・・・？

また私がせれんお嬢様を殺したと疑われなければいけないの・・・？
冗談じゃないわよ……………。

こんーなわけのわからない高校生ぐらい？の人になんて疑われなければいけないのよ・・・

ってまだせれんお嬢様を殺した犯人だなんて疑われていないかあ・・・

まあ、いっか・・・。

開き直りはつねは高校生と警察が待っている玄関先へ向かった。

「はい、どちらさんですか？」

といいながらドアをゆっくりと開ける。

そこには高校生と警察のが待っていた。

「〇〇県警の石野っていうものだ！」

今日は、このラベンダー屋敷に用があって来たんだ。」

〇〇県警のある刑事が警察手帳を見せる

これで本当に警察を来たと納得した。

警察沙汰だなんて一体何があったの・・・？
はつねは深いため息をつく

「一体何があったんですか？」

うちは何もありませんが・・・。」

はつねはきっぱりと警察に向かっていった

「それはここにいる少年にいたまえ!!！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・?」

なんで見ず知らずの高校生がうちに関係あるのよ……。

一体なんなのこの高校生は・・・

「まずは自己紹介をするねえ…。

小生は時津潤哉…

生まれは東京、育ちは北海道…」

今なんだったの・・・？

ショウセイ？小生？

たしか今自分のこと“小生”っていったよね…。
何？何なのよ…。

この高校生は……

「では、入っていいでしょうか……。」

「別に構いません…が…。」

（冗談じゃないわよ…。

なによ…。あの高校生は

勝手に人の敷地にズカズカと入ってくるなんて……常識がないわよ。
）

はつねは、心の中で時津にたいしてめっちゃくちゃ怒っていた。
不機嫌そうに時津と石野と名乗る刑事を屋敷内へと招く。

「――時津は辺りを見渡しながら、”何かをメモ”して調べている。

「ほう、なかなかの屋敷ですね…。」

手帳に何かを書きながらボソツと呟く。

（はぁ……？何呑気なこと言っているのよ…。この人は……！

一体何しにここに來たのかしらね……。

呆れるわね……。

目的すらわからないわ。）

「あの……すいませんが、例のせれんお嬢様が首を吊って亡くなっ
た部屋はどこなんでしょうか？」

「えっと、二階ですけど……。」

思わず階段のほうを指を指して何気なく呟く。

（やっぱり例のせれんお嬢様の自殺の事件に関係するそうね…。
この高校生ただ者ではないのは確かだわ。

何かが起こる気がする。）

「それでは、部屋の中にでも入らせてもらおうかなー。」

時津と名乗った高校生は、階段を一段ずつと上がる。

この時から、はつねは、何か嫌な予感が身に振る舞って来るような気がして恐ろしくてたまらなかった。

（何？この高校生、勝手に人の屋敷にズカズカと入って来て何様のつもりかしらね…。）

はつねの怒りが収まらない。

早く得体の全く知らない時津って高校生に屋敷から出て行ってほしかっただけ…。

その気持ちかはつねの中でおさまらないほど込みあがっていた。

ー時津がせれんお嬢様の部屋のドアを開ける。

彼は、部屋に入った瞬間、まばたきもしないその内に何やら部屋の中を調べる。

「ちなみにあなた方はなぜ、お嬢様の部屋の中を調べているの？」

「ここの屋敷のお嬢様がね…自殺した理由が附に落ちなくて彼女がクビを吊ったこの現場なら何かしら残っているのではないかと思っ
て調べているんですよ…。」

それだけ言い残しラベンダーの花付近からドアの周り、そしてお嬢様のクビを吊ったという場所まで全て調べ尽くす。

「最後はここだね…。」

一言つぶやいてから窓に手を差しのばして開けた。

一瞬だけ暖かなが空気が中に入る。

そう、それは涼しげな空気。

時津は下のぼして庭へ目をやる。
そして、下に何かがあるか確認する。

（ん。下に落ちている妙なネジらしきものは一体なんなんだろう？
どうやら、ネジの先がかけているようだねえ。）

時津は下を見下ろしながら深く考え込む。

そして、即座に何かを確信したような表情へと変わる。

この散らばったネジをじっくりと見物した後、窓ガラスの様子がしつかりと調べ尽くす。

――彼は完全に確信した。

時津から微妙な笑みが零れた。

笑いを零した後、石野と名乗る刑事に小声で呟く。

「やはり、彼女は疑わしいですね…。」

「何が、疑わしいんだね？」

「このせれんっていうお嬢様が首を吊ったって事件で自殺なんかじゃなく彼女による殺害ではないかと思うんですよね…。」

下に散らばっている足のないネジを見て瞬時に解ったんですよ…。」

「ふーん。それで…君はこのはつねさんとやらがお嬢様の事件について疑わしいと…。」

「ええ、そうですけどねえ…。」

やっぱり私があ的事件の犯人だと疑われているみたいね…。
その根拠聞かせてもらおうわ。二人の会話にたいして何気なく耳を傾ける

何を言い出すのは気になっていた。

「君だよね？せれんお嬢様とやらを殺害した張本人は…」

北の名探偵（後書き）

えっと、久しぶりにこっちを更新しました
もう一つ連載は休載です

忙しいんです

っていうかこっちが全然更新していないんで：

ハア：時津のキャラがおかしいし、おまけにしばらく見ないうちに
はつねが急激に性格が変わっている

っていうかおとなしいはずのはつねの心の中

ちよっと酷いような気がする

きっと、書いている作者が悪いんでしょうね：

文章に性格が出るって恐ろしいですよ：

またテスト終わったら更新するかもしれないです

では、よろしくお願いします

追いつめる名探偵、追いつめられるメイド（前書き）

時津の口調が変？

追いつめる名探偵、追いつめられるメイド

「君だよねえ…。せれんっていうお嬢様を殺害した犯人は…」
得体のしれない高校位の男子が鼻笑いまじりでつぶやく。

「自信満々」を表示する深々しい笑みをわざとらしく浮かばせる。

余裕な笑みにはつねは迫り込んできた感を覚える。

知らない間に冷や汗が頬にまでつたつて零れて落ちていた。

”自分の身に何か危険が発される”

そんな予感を肌で味わっていた。

予感が頭から離れなくて俯いては足元を気にかけていた。

硬直した足が妙な武者震いだけして不安定だった。

顔がやけに青く染まっていく。

恐怖に怯えながら反論の言葉をかけようとする。

「なんで、私がせれんお嬢様を殺害しなければならないの…。根拠はあるの？ しかもあれはお嬢様の自殺よ。殺人事件じゃないわよ。」

怒鳴りつけようと時津に迫り込んでいくはつね

彼女は必死になって強く言葉を述べた。

それでも時津の冷静さは途切れないまま

それどころかクスツと軽く笑う。

「勿論、君が犯人だと裏付けるトリックは知っているさ。君が犯人
っていう根拠もあるさ。」

「トリック…？」

眉をしかめて首をやや傾ける。

「そうですねえ…。確か情報によるとあのせれんお嬢様の部屋は密室だったハズ…っていうことは普通は自殺だと思うでしょうけどあるトリックを使えばそれも可能となる。」

「あるトリック？」

また眉をしかめる。さっきよりも深々しく眉を細める。

時津の吐いた言葉がやけに引っかかる。

「トリックって…ちゃんと説明しなさいよ！どういうことよ。」
はつねは怒鳴りつけては時津に視線を向ける。

しかも、時津の様子は変わらないまま
もう『トリック』について全てを述べることしか見えていない。そんな素振りを見せていた。

「では、トリックを説明するためにせれんお嬢様とやらの部屋に行くとしましょう。そこに”真実”が隠されているんでしょうからね…。」

余裕綽々の態度を取ってさっさとせれんお嬢様の部屋へと行こうとする。

何も躊躇わずにただ『せれんお嬢様の部屋』へと向かう。

嫌な予感を感じながらも”何か”起こるような気がたまらなかった為、お嬢様の部屋までと足を運ぶ。

震えていた足を無理に動かして彼の隣で歩いていた。

ドアの軋む音など気にも留まらず部屋の中へと入った。

そこは、少々の埃だけが壁に被っていた

ラベンダーの花々ははつねが半年間かけて育てただけあって綺麗に咲き誇っている。

窓ガラスは少々曇っている。今の嫌悪な気分と類似しているような気がする。

はつねはすぐに今の状況を思い出す。

「ねえ……。何なの？トリックって……」

不意に時津に問いかけをした。

聞いてはならないこと

しかし受け止めなければならぬ気がして覚悟で聞いた。

次の言葉を述べる時に時津の一つの躊躇いもなく説明をしようとする。

「先ず密室トリックはこの窓ガラスに関係あるんです。」

曇った窓ガラスの方向へ指を指してから笑みを浮かべる。

そして、トリックを説明することを楽しんでいる様子を見せた。

そして、窓ガラスの近くへと行く。

「この窓ガラスを開けるとですねえこのようにネジが沢山あるんですよ。しっかりとハマったネジがねえ……。これ何だと思います？」

突然質問を問いかける。

しかし、はつねには”一体何なのよ”とでもいいかげんな表情を作る。

「この何の変哲のないネジが今回を解くキーワードなんですからね……。その証拠にはハマったネジの周りに固まったようなポンドがくっつい

ている。これで”何”がネジと関係するのかわかりますよね…。」
不敵な笑みを浮かばせてわざとらしく視線を向ける。

「一体何なのよ？それがなぜ」（イコール）私がお嬢様を殺した犯人だという根拠になるのよ。ネジなんか知らないわよ。」

「いや、これこそトリックが使われたっていう決定的な証拠…。一見ネジはしっかりとめられているように見えるけど全部はめられているとは限らないんじゃないですよ。そう…。例えばネジにしてはまだ寸足らずのネジだったり。」
時津は一瞬だけ妙な笑みを浮かばせる。
そして間を取ってから再び話し始める。

「つまりこのネジは頭がついているとは限らないですよ…。付着してしまった今はネジの状態がわからない。つまりネジの頭を切れば可能となるトリックなんですねぇ…。まあ、はつきりというならばあなたはここのネジ穴からネジを外してからネジを切りそして、寸足らずのネジをポンドで付け直す。」

そして部屋から飛び降りてあとは乾くのをまつだけ。それで密室トリックは完璧なんだなあ。トリックなんて出来るのはこの時間帯にお嬢様と同じ部屋にいたというはつねさんしかいないと思いますけどね…。」

「なるほど。もしも殺人事件ならばその時間帯にお嬢様と一緒にいた私が疑わしいわね…。でも、この事件を他殺って言い切れるの？」

その言葉を聞いた瞬間敏感に反応し始める。

そして、ハンカチに包んだ何かを示す。

「これは何でしょうね…。ネジの頭がなぜ庭に落ちているのでしょうか…。トリックのために使ったのでしょうか…。」

はつねの表情は険しさを一気に加わる。そして大声が込み上がってくる感じがした。

「ち、違う…。私はネジなんて知らない。」

はつねは険しさを見せて反論する。

「――しかし、時津は気持ちを察することがないまま

「じゃあなぜ庭にネジの頭なんて転がっているんですかね…

誰かがあなたに罪をきせるためにわざとネジの頭を散らしたっていうことはないですね。――その時間帯に犯行可能な人物は一人ですからね…

このネジの頭が散らばっていることが何よりも証拠

さあ、今のうちに白状しましょうよ…。あなたが犯人だって素直に
いえばいいんですよ…」

時津は笑い混じりで説明を加える。

（何よ…。何なのよ…。私は…私は…お嬢様を殺した犯人なんかじゃないのに…どうして疑われなければいけないの？）

時津の視線を確認して心の中で苦労が始まった。

まさか、これから自分自身の身を捨ててしまうと思ひもなかった。そして親友の七槻は後程、憎しみが増加するとは誰も知る余地もなかった

追いつめる名探偵、追いつめられるメイド（後書き）

えっと慌てて書きましたっていうより半分手抜きです

疑われる裏の苦しみ

（何？何なのよ……？あの男は……）

不安そうな表情をしているのはつねが立ちすくんでいた。微かに震え上がっていた。

――もうこれ以上は、限界

そんな感じの様子を見せる。

次から次へと自分を狙っているような視線が怖かった。早く苦しみから逃れたい気持ちでいっぱいだった。

今は、事情聴取の途中

時津は、何らかの質問ぜめをはつねにぶつけている。冷静を装って余裕を表示する笑みを見せる。

――”質問ぜめをさせる度に辛い”

はつねがそんな辛さを抱えている事など気に留めずに時津は次々とせめに入る。

「君以外にこの犯罪を行う事が出来るなんてありませんですねえ……。自殺する人間がわざわざ釘を庭に捨てたりすると思えますかあ？他殺に見せ掛ける為？でも仮にそうだとしてもねえ……何も彼女にとってメリットがないんですよ。」

顔色一つ変えずに偉そうな態度を取って今の現状というものを説明する。

――また、まただ……。

『また』っていう言葉に反応して怯えた表情をする。

「だから、あなたこそしつこいですね…。毎日毎日同じ事を言わせて……私はせれんお嬢様を殺していないって言っているのに……。」
いつも言っているセリフに嫌な感じを感じる。
もううんざりという感じだった。

時津は、自分の気持ちを受け入れてくれない。

そんな事をはつねは自覚する。

同じセリフを毎日のように言ったり聞いたりする――これがうんざりな事のように思えてきた。

事情聴取の時間――いつも質問ぜめをされている感じがする。

時津の話が終わった後も”彼の変わらぬセリフ”が蘇って嫌悪感を抱く。

「では、今日の事情聴取はこの辺で引き上げておきますからね……。
明日もまだ聞きたい事がありますのでまた事情聴取を行いますからねえ。」

また事情聴取が終わった。

しかし、満足感には至らなかった。

むしろ嫌な言葉ばかりが頭の中に印象に残る。

日々が経てば経つ程嫌な言葉が回想される。
その度に辛さが爆発する気がした。

明日も辛い言葉の言われるのか
そんな事を考え込んでしまう……。

妙に悪夢にうなされてしまう気がした。

はつねは静かに自分の部屋に戻る。

そして、手にしていた携帯電話に電話をかける。

落ち着きが欠けてしまった雰囲気があった。

「もしもし… なっちゃん……………」

悲しそうな声を電話に向かって漏らす。

「もしもし、はつね！？ ってどうしたの……………」

途中慌てたような口調で叫ぶ。

「私が………… 犯人だって………… 疑ってくるの………… よ」

………… えっ？

七槻は、はつねの言葉を深く考え込む。

「あのね、変な喋り方の高校生探偵が私を疑っているの… 助けて！
なっちゃん……………」

「……………！？」

七槻は強張った表情になる。

拳に力が入ってスイッチが入ったような感じになった。

「その高校生探偵はどこに？」

「わからない。事情聴取が終わってこの屋敷から出たから……………」

七槻はちよっと考え込む。

そして結論を出したかのように喋ろうとする。

「じゃあ、待ってね…。今すぐこっちに向かうから……。」

「でも……なっちゃんは最近事件で忙しいんじゃない……。」

「はつねが疑われているのに…黙ってられないよ…。」
心配なはつねに対して七槻は言い切ったようにつぶやく。

（もっと早くに気づけばこんな事にならなかったのに…とにかく早く行かなければ…）

七槻は、即座に走った。

地元刑事の

「なっちゃん。ちょっと…」と叫んでいる声を無視して電車の駅が見つかるまで走る。

（もう限界が来た…いつもいつも疑われて私の人生ろくな事がない…。）

悲しんだ表情を見せる。

手にロープを持って準備をする。

「ごめんね…。なっちゃん」

小さな声でつぶやく。

そして、自分の首にロープを巻く。自殺する準備を整えて悲しそうにしていた。

まだ七槻は知らなかった

自分が屋敷に向かっている途中に既にはつねが自殺してしまった事を…

（間に合ってね…。その前に自殺しないでね…）
その事を電車で祈っていた。

疑われる裏の苦しみ（後書き）

更新しました

はつねついに自殺です展開が早い気がします：

因みにこの今回話はずいぶん前に書いた文章をちよっと手直しました
だけです。かなり今よりも稚拙な分ご了承ください

では、こちらもう言いたいことをすべていったら終了ですでは、
この辺で失礼します

復讐を思い立った時（前書き）

前に書いたものです。文章の表現など全く変えていません。ご了承ください。

復讐を思い立った時

（はつね…無事でいてね…。）

七槻はひたすら願っていた。

「はつねの無事だけを…」

駅が到着した。それと同時に七槻は必死に走る。涙を浮かばせてがむしゃらに走った。

目指す先にはラベンダー屋敷しか見えていなかった。

ラベンダー屋敷が近くに見えてきた。その瞬間に淡い期待が膨らんできた。

庭には臭いある多数の花が揃っていた。
走っている時にも感じる特殊な臭い

単刀直入ですぐにラベンダー屋敷に走る七槻

何も躊躇ためらいもなく屋敷の方まで走った。

必死にインターホンを押す。焦っているせいか少々雑にインターホンを扱う。

押した瞬間に誰か屋敷の使用人の人が玄関先へ来る。

「はい、どちら様でしょうか？…て越水様でしょうか？すみません。今、悲しいお知らせがありました…」

「えっ、悲しいお知らせって…」

七槻はもしかすると思いなから玄関先の使用人に向かって叫んだ。
『もしかすると』なんて事にはなって欲しくない。その事が頭の中

でまわっていた。

即座に玄関から屋敷の中まで足を運ぶ。

使用人は、二階のはつねの部屋の方へと向かう。七槻は、使用人の後についていくようにすたすたと歩く。

歩く度にはつねは無事なのか？その事で不安と迷いが増していく。

密かに冷や汗が頬につたっていた。取り敢えず今は、拭かずにおいていた。

「友人のはつねさんの部屋はここです。」

使用人は何気なく部屋のドアを開ける。

七槻はこの瞬間『会えるのでは、ない』かと”淡い希望”と『命はもう亡くなっている』のでは”可能性大の絶望”の2つの気持ちが混ざっていた。

ドアを開けた瞬間、無様な姿で首を吊っている人がいた。その死体を見た瞬間、七槻は、涙を零す。

七槻自身気付かなかった。涙がポロポロと頬をつたって零れ落ちていることに…

涙と冷や汗が同時に頬につたわる。寒気が走る風が中に入り込む。

七槻は、枯れるような勢いで泣き続ける。

（はつね…やっぱり…やっぱり自殺してしまったのね…。こうなったら…）

七槻は、はつねの首を吊っている姿を確認してポケットから何かを取り出す。

ピアスを一回見てそして、握りしめる。そして、何か躊躇^{ためら}ったような顔をする。

思い立ったかのように勢いでピアスを耳の方へ持っていく。
そのあと耳に穴を開けようとする。

その瞬間、鮮血がポタポタと床に零れ落ちる
僅かな血が濃く出てくる。

（痛い……。血が流れる。でも私よりはつねの方がつらいはず
毎日その『高校生探偵』に犯人だと疑われて苦痛で涙を吞んで自殺
したのだから……。私の痛みぐらい……）

「つつう……」

やはり強がっていても痛みは感じる。そのせいで声を漏らしてしま
う。

その声に使用人は反応する。

血まみれになっている七槻を見て慌てたような素振りを見せる。

七槻は『これぐらい……』強く言い聞かせる。

泣いているせいか冷静さが欠けている。

「あの越水様……はつねさんは、自殺されたんでしょうか？」
その言葉を聞いた瞬間、目覚めたかのように我に振り返る。

”

「変な 喋り方の高校生が私を疑っている。」”

死ぬ間際にはつねが呟いたセリフを何度も繰り返して思い出す。その言葉を思い出した瞬間、七槻の顔色が変わる。

微妙に歪んでいた。

（まさか、はつねは誰かに責められて耐えきれなくてそしてついに自殺までしたのだろうか？）はつねは罪を勝手に着せられて耐えきれない気持ちが増殖したのかな？）

「でも一体誰が…」

不意に小声でつぶやく。

考え込む姿勢にする。

「”変な高校生”が私を疑っている」

再び言葉が蘇って来る。

”変な高校生”っていう言葉がやけに強く聞こえる。

七槻は、頭を回転させる。

（”高校生”今、現在有名な高校生探偵を洗い流せばはつねを自殺に追い込んだやつの正体がいずれわかるはず…調べてみよう。）
涙を拭いすぐに立ち上げる。

もう悲しい表情などない憎しみが混じった怒りの表情になっていた。

部屋からすぐに出て屋敷からも走って飛び出す。

「あっ、越水様…」

使用人は七槻を止めても七槻は一向に振り向かない。

血の気が増幅した七槻はただひたすら走っていた。

はつねを自殺に追い込んだ”高校生探偵”を探るために……
地元へと向かった。

復讐を思い立った時（後書き）

この小説もいよいよ最後です。読んでくださると嬉しい限りです。
今、忙しいですけどね…。勉強を少しやっています。

復讐の計画

七槻は、地元へと向かった。

はつねを自殺に追い込んだ高校生探偵を誰なのか調べるためにだけに……

1分1秒でもはやく地元へと行こうと足を踏み入れる。
電車でじっとして”復讐”の事だけを考えていた。

地元の福岡に着いた。ざわざわと賑わっている中、七槻だけは、眉をしかめて怒りがこもった表情をしていた。
密かに拳を握りしめて震えた。

七槻は、自宅に戻って資料をあさっていた。
すぐに資料に目を通して凝視する。
そして、散らばっている資料に紛れ込んでいる眼鏡を手にとってかける。

資料には、探偵リストが書いてある。
今、現在の探偵について書いてある記録
それをしっかりと読んでいる。
そこには、最近有名になった高校生を限定とした探偵の名が多数書かれていた。

『福岡県越水七槻、北海道時津潤哉、東京都工藤新一・白馬探、大阪府服部平次（その他大勢省略……。）』
そこには、色んな探偵の名が記入されている。

七槻は”探偵の名”をしっかりと見渡す。そして、手で顎を押さえつける。

その大勢の探偵の詳細が書いてある部分に目線を向ける。

（ふーん。最近有名な探偵は高一が多いみたいね……。しかも、それぞれ特徴あるみたいね……。）

感心しながら資料を深く見通す。

ここから”何か”の手がかりをつかめそうな気が感じた。

はつねを自殺に追い込んだ人物の情報――それは、密室トリックをあっさり解いた高校生の探偵

”密室トリックをあっさり解いた”

それは、それなりの実力を持った探偵
つまり、高校生の中でも名高い探偵

最近では、有名になった探偵――そのリストになっている探偵
『工藤新一、服部平次、白馬探、時津潤哉・・・（あと2・3人ほど省略）』

（この中にはつねを自殺に追い込んだ高校生探偵がいるのね…。絶対に見つけ出してやるわ！！）

七槻は、眉を上げて怒った表情に変わった。

そして、他の資料にも目を通して天才的な頭脳を回転させる。

（確か・・・はつね最後に…）

七槻ははつねが最後に遺した言葉を思い出そうとする。
はつねの最後遺した言葉

それは、『”変な喋り方”の”高校生”が私を疑っている。』

”変な喋り方”のと断言した。その高校生の探偵は、”変な喋り方”
ーそれがキーポイント

七槻はその事も踏まえて天才的な頭脳を更に回転させる。

”変な喋り方”っていう言葉を意識する。

暗い自分の部屋にわずかな光が入る。

七槻はその光をバックして考え込む。

”変な喋り方の最近有名な高校生の探偵”

その点をすべて共通する人物を次々とあげる。その候補の人物の名を紙に書き上げる。

『服部平次――有名な高校生探偵の中で唯一日常生活で関西弁を使う探偵。標準語は使わない。』

白馬探――有名な高校生探偵の中で唯一海外に留学に行った探偵。海外留学歴が長く標準語が疎かになっている可能性大。

時津潤哉――生まれは東京で育ちは北海道。口調が少々なまった感じそして、有名な高校生探偵の中で唯一「小生」が一人称。いわば自分の事を変わった呼び名で呼ぶ。』
そのデータを頭に入れて記憶する。

資料を凝視して深く考え込む。

手をふるわせて次の行動を起こそうと立ち上がる。

（なるほど……データの結果この3人の高校生探偵がそれぞれ今回の事件の共通点がしっかりとあるみたいだね。それともう二人復讐しなければいけない人物がいるわ。）

別の資料を持って来ては、目を離さずに眺める。

『甲谷廉三――四国の◎◎県のラベンダーの屋敷の執事』

＊せれんお嬢様が自殺した事を知っているのに黙っていた。事情まで知っていた。

槌尾広生――昔劇団の団員だった。

＊密室トリックとなる証拠を残した。ラベンダー屋敷に空き巣に入った。』

以上のことを頭でインプットしてから七槻は、立ち上がる。

そして、何かの決心を決める。

（よし、決めた。――槌尾っていう人をデレクターとして雇って例の三人の探偵を呼び出してやる。）

そして、一つのチラシを取り出して引っ張るように見る。

『探偵甲子園』とかかれたチラシを凝視する。

（探偵甲子園を開催しよう。そして、あの例の三人にあの時ののはつねを殺した時の密室トリックを問題に出させよう。はつねを自殺に追い込んだ探偵ならすぐに解けるはず……ここは試してみよう。）
七槻は新たな決心を固めた後に手紙を書くようにする。

あの三人に招待状を渡す役、そしてあの三人にこの問題を出させる役その役を槌尾と甲谷にやらせる。

もちろん、金を前もってあるって言うておこう。そして、槌尾には、手紙でこう書こう。

『偽ディレクターを引き受けてくれ。昔劇団としての演劇で素晴らしいから是非引き受けて欲しい。服部平次、白馬探、時津潤哉、越水七槻の4人の高校生探偵を無人島に連れて探偵甲子園をやろう。もちろん、日売テレビのデレクターって偽って……。前金で50万バレなかったらプラス50万バレても最後までしらばくれてたら半額25万を払う。』

っていう内容をかく事を決める。

日売テレビの社員にも偽ろうとそこまで計画を企てていた。

密室トリックには忌まわしき槌尾を縛り付けてやる。そして、密室トリックを解いた探偵を探しだしてやる。

それを誓って行動を実行しようとした。

七槻は既に何かの殺意を抱いていた。

殺意を抱いたこのとき（前書き）

七槻の一人称です

あえて簡単にこうしました

殺意を抱いたこのとき

私は殺意を抱いてしまった。あの時の……はつねが首を吊った時の密室の仕掛けを今も見事に見抜いた時津潤哉に……。

”殺意を抱いては、ならない。”

人を殺そうなんて思っではいけない。

特に私は探偵なのに……

いや、探偵じゃなくても”殺意”なんて抱いちゃいけないけど……

私は、今まで人を殺したりした犯人たちを捕まえたりして殺人罪を許さなかったのに……

その私が殺意を抱いてしまった。

今回ばかりは許さなかった……

密室トリックをあっさりと解いた時津の事だけは……

私から、最も仲が良いといわれる親友のはつねを自殺に追い込んだのだから……

高校生の頃から私には、普通に大勢の友達がいた。けど……親友といえる唯一の存在ははつねだけ。

高校生を卒業してからも私と友達である人なんてそうそういなかった。

高校生を卒業した頃まで友達いや、親友といえたのは唯一はつねだけだったのに……なのにそんなかけがえのないはつねを時津は奪った。

もう、はつねの敵を取れずにはいられない。

あの時のはつねがどれだけ辛い思いをして日々を過ごしていたかなんてわからないくせに……

どれだけ苦悩したかなんてわからないくせに……

時津にもはつねが味わった苦しみを植え付けてやる！！

私達の苦しみをそのまま植え付けてやる！！

私は部屋に居る時に自分に誓った。

”はつねの為に時津を殺してやる！”って

そして、私は部屋を出て向かった。時津の部屋へ

私は、部屋に入る前も少しだけ躊躇^{ためら}ったりもした。

本当に人殺しなんていいの？って我に振り返ろうとした。

でも、私は自分の弱い心に負けてしまった……。そして、部屋を思わずノックしてしまった。

時津の足音が聞こえる。時津が部屋から出て来てしまう。

もう、近づいて来る。

「越水さん、一体どうしたんですかぁ？今取り込み中でね……。用は、ちよつとねえ……」

時津のやつ密室トリックを解いて笑っているわね……。ほくそ笑んでいるのも今のうちよ。

「いや、実はボクも事件の真相わかつちやて……。一緒に答え合わせしようかと思ってね……」

言ってしまった。無理に部屋に入ろうと言い訳を言ってしまった。
このまま時津を殺すしかないのかな？

「まあ、いいけどねえ…君も密室トリックを解いたのかねえ…」

「うん…。そうだけど…」

「じゃあ、答え合わせとして小生から推理するとしますねえ…。先
ず小生の推理によると密室トリックは……（以下略・説明は長いか
ら…）」

自慢げに語っているわね、あの頃の嘘のトリックを……
私の親友の命を奪った事も忘れて……

もう、殺したい。もう…殺す以外に手段が取れない。
あつ、鉄パイプが近くに落ちている。この時津を殺すにはちょうど
いいわね…。

この悪魔のような時津には、撲殺がお似合いよね…。
私は、もう人を殺してしまう。

たった一つしかない大切な命を奪ってしまう。
でも、手遅れ…私は既に鉄パイプを握りしめているから…
もう時津の頭上に鉄パイプが当たってしまうから…

『ドカッ』と鈍い音が部屋に響いた。殺した張本人である私が一番
驚いた。まさか本当に私が人殺しをしてしまったから…

私も人殺しは嫌いだけど…初めて人を殺した。

もうどうにも出来ない。

ただ、私には時津を殺したことを偽ることしか出来ない。

この探偵甲子園で私は、自分を悪夢におとしいれた。

私に残った記憶は人間として最も卑劣な行為である人殺しをしてしまった事

ただそれだけだった：

私、越水七槻が殺意を抱いたのは、一年前の探偵甲子園開催の今日だった。

後書き／追記

こんにちは。魔法戦隊三輪野助というものです。

勝手に書いたこの小説展開が早い気がします（^| ^;）……
いちおう完結にしましたm（| |）m。

えっ、最後の部分は書きたくて前に書きました。

ということです！ぶんと完成度がひくく稚拙な状態になりました。

せっかくの小説を無様な状態にしてしまい申し訳ありません（| |）
○この小説を約半年ほど書いていた作者として言わせていただきます

それに先ずこの小説を描き始めた動機は、犯罪者としての印象しか残らなかった七槻を深く書きたいという気持ちから書きました。

しかし、忙しいのがあったせいで勝手に途中から更新を遅めたりして申し訳ございません。

軽はずみで小説を書きたがっていた私はまったく後先考えずに連載中の小説をためたりしていました。

そういう意味でもこの小説をしっかりと書けなかったと反省しています。

本当にあやまり切れない気持ちでいっぱいです。

最後の部分は当初に楽しんでこっそり書いていました。

多少変えた部分もありますが、ほとんど乏しい文章ばかりです。いやあ、彼の自分は充分情けないやろうような気がします。

過去の自分には反省しております。

えっと、次回作書きたいなあとおもいつつ……4月～七月は忙しくて小説執筆できません。

落ち着いた10月辺りも今度は受験勉強で大変なのでそれどころではないです。

暫くここにもあとを残せませんがどうか覚えていただけると嬉しいです

では、この小説を最後まで読んでくださった読者様、先生達にはありがとうございます
m (_ _) m

4月 2日 魔法戦隊三輪野助

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0296b/>

高校生時代～殺意を抱いた今まで

2010年10月10日23時32分発行